富山県中新川郡舟橋村

東芦原西角堂遺跡調査報告書

2009年3月

舟橋村教育委員会

富山県中新川郡舟橋村

東芦原西角堂遺跡調査報告書

2009年3月

舟　橋　村　教　育　委　員　会

序

県東部・富山平野のほぼ中央に位置し、おいしい水と豊かな緑に恵まれた舟橋村は、昔から水量豊かな河川も有り、舟の運行も盛んで、仏生寺城の外堀に利用された京坪川や中級河川の白岩川は、旧中新川郡で米俵の積み出し等の中心的役割を果たし、また、扇状地として広がった平野は大変肥沃で農業に適していたため、太古より大きな集落が存在し、人が沢山住み着いていたようである。

近年、全国で市町村合併が進む中、舟橋村が平成18年３月に北陸三県では唯一の村に、また自治体総面積3.47㎢は全国最小となった。しかし、交通の利便性や宅地開発の振興により、人口は増加傾向が続いており、今なお近隣市町のベットタウンとしても発展している。

今回の調査は、東芦原西角堂地内における格納庫及び宅地造成に先立って施工した、当該地区の東芦原西角堂遺跡における発掘報告である。この調査では縄文時代の土器、古代の須恵器、中世の陶磁器や土師器、木製品等が発掘された。

これらは、この地域に住み着いた人々の集落群と考えられ、出土品は村の歴史を知る上で貴重な資料となった。

おわりに、調査実施及び報告書刊行に当たり、富山県埋蔵文化財センターを始め関係各位にご援助・ご協力をいただきました。

衷心より感謝申し上げます。

平成21年３月31日

舟橋村教育委員会

教育長　塩原　勝

例　言

1　本書は、平成20年度に行なった株式会社森崎工業による格納庫・宅地造成建設事業に伴う東芦原西角堂遺跡の発掘調査報告である。

2　発掘調査の所在地は、中新川郡舟橋村東芦原35－１番地である。

3　調査事務局は舟橋村教育委員会内に置き、喜田義樹主事が担当し、教育長塩原勝が総括した。

4　発掘調査及び報告書作成は、株式会社森崎工業の委託を受け、舟橋村教育委員会が主体となり、富山県埋蔵文化財センター指導の元に、株式会社アーキジオ（調査担当上野章）が実施した。

5　発掘調査期間は平成20年12月10日～平成20年12月26日である。

6　遺物の整理・報告書作成業務は、平成21年１月16日から同年３月31日までの期間、株式会社アーキジオが行った。

7　発掘調査及び整理作業に伴う経費は、すべて株式会社森崎工業が負担した。

8　調査等参加者

（現地作業）

多鍋清・山崎行光・佐渡早津江・野越数雄・相原峰子・井澤靖夫・高瀬邦引・中田昭男・砂原憲彦・中村宗和・西内勇・鏡武夫・笠原晃・関根一貴・竹内賢誠・西川精・船木藤夫・福井康夫・蜷川正美・荒井美子・鈴木清枝・安藤朱美

（室内作業）

真田恭子・新保利恵・高橋英吏子・畑シノブ・水巻麻里・渡辺加世子・佐野睦美・宮口美香・新田三喜子・橋真理子

9　出土品及び発掘調査・整理作業に伴う測量図・実測図面、写真等の記録類は富山県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　例

1　本書で使用した方位は真北である。また標高は海抜高である。

2　座標は国土座標（世界測地系）を基に、Ｘ＝7723.92、Ｙ＝12023.45をそれぞれＸ０、Ｙ０の基準点とし、ここから10ｍを大区画とし２ｍごとの小調査区を設定した。

3　土色の説明・表記については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』（2004年版）による。

4　出土遺物の時期に、富山県埋蔵文化財センター酒井重洋氏に教示を得たことに深く感謝する。

5　遺構は調査中に通し番号を付したものを使用した。遺構種別略号は掘立柱建物跡を〔ＳＢ〕、土坑・穴を〔ＳＫ〕、溝を〔ＳＤ〕を、不明遺構を〔ＳＸ〕、柱穴を〔Ｐ〕と表記した。

6　調査区は、上記２の国土座標Ｘ軸、Ｙ軸のそれぞれ下３桁を用い表示した（例：Ｘ＝77284→Ｘ284、Ｙ＝12024→Ｙ024）。

目　次

序
例言・凡例
目　次
第１章　位置と環境……1
第２章　調査に至る経過……2
　第１節　分布調査……2
　第２節　試掘調査の概要……2
　第３節　試掘調査の出土遺物……3
第３章　調査の概要……4
　第１節　調査の方法……4
　第２節　各遺構の概要……6
　（１）掘立柱建物……6
　（２）土　坑……7
　（３）溝……11
　（４）旧河川跡……11
　第３節　出土遺物……13
　（１）縄文時代の土器……13
　（２）弥生時代から古代の土器……13
　（３）中世の土器……13
　（４）近世の土器……13
　（５）中世の木製品……15
　（６）小　結……20
　第４節　調査結果からのまとめ……20
　（１）箸状木製品について……20
　（２）集落について……25
引用・参考文献……27
写真図版

表　一覧

表１　試掘調査出土土器一覧……4
表２　掘立柱建物計測表……12
表３　土坑計測表……12
表４　溝計測表……12
表５　本調査出土土器一覧……13
表６　箸状木製品出土の主な遺構一覧……21

挿図　一覧

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第２図　試掘調査と本調査の位置……2
第３図　試掘調査出土遺物実測図……3
第４図　遺構全体図と断面図……5
第５図　掘立柱建物ＳＢ01・02平面図と断面図…6
第６図　遺構平面図と断面図……8
第７図　遺構平面図と断面図……9
第８図　出土遺物実測図……14
第９図　ＳＫ23箸状木製品の大きさ……15
第10図　ＳＫ04出土木製品実測図……16
第11図　ＳＫ04・05出土木製品実測図……17
第12図　ＳＫ23出土木製品実測図……18
第13図　ＳＫ23出土木製品実測図……19
第14図　箸状木製品出土の主な遺構一覧（近県を中心に）－１（番号は表６の記載Noと一致）……22
中国　馬王堆一号漢墓軑侯夫人の食案　１．奈良市平城宮　土坑ＳＫ820
２．奈良市平城宮　土坑ＳＫ217　３．高岡市麻生谷遺跡（第２地区）井戸ＳＥ202
４．南砺市徳成Ⅱ遺跡　井戸ＳＥ01　７．氷見市鞍川Ｄ遺跡　井戸ＳＥ01
８．南砺市蛇喰Ａ遺跡　井戸ＳＥ01　９．南砺市蛇喰Ａ遺跡　井戸ＳＥ02
10．南砺市蛇喰Ａ遺跡　井戸ＳＥ03
第15図　箸状木製品出土の主な遺構一覧（近県を中心に）－２（番号は表６の記載Noと一致）……23
６．富山市清水堂Ｂ遺跡（Ｂ地区）井戸ＳＥ02
11・12．上市町江上Ｂ遺跡木枠施設とＳＤ070付近と溝ＳＤ037（遺跡中央）
21．石川県穴水町桜町遺跡　土坑ＳＫ05　22．石川県穴水町桜町遺跡　井戸ＳＥ01
23．石川県穴水町御館遺跡　井戸ＳＥ03　24．石川県穴水町白山橋遺跡　土坑ＳＫ02
25．石川県穴水町白山橋遺跡祭祀埋納遺構
17．舟橋村東芦原西角堂遺跡　土坑ＳＫ23　18．南砺市井口城跡　土坑ＳＫ25
第16図　箸状木製品出土の主な遺構一覧（近県を中心に）－３（番号は表６の記載Noと一致）……24
19．南砺市井口城跡　井戸ＳＥ02　20．南砺市井口城跡　井戸ＳＥ01
26．新潟市山木戸遺跡　井戸ＳＥ01　27．新潟市山木戸遺跡　土坑ＳＫ09
28・29．秋田県井川町洲崎遺跡　溝ＳＤ706・箸500本の図・溝ＳＤ706の出土状況
第17図　舟橋村と付近の中世掘立柱建物の床面積……26
第18図　舟橋村と付近の中近世集落の変遷……26

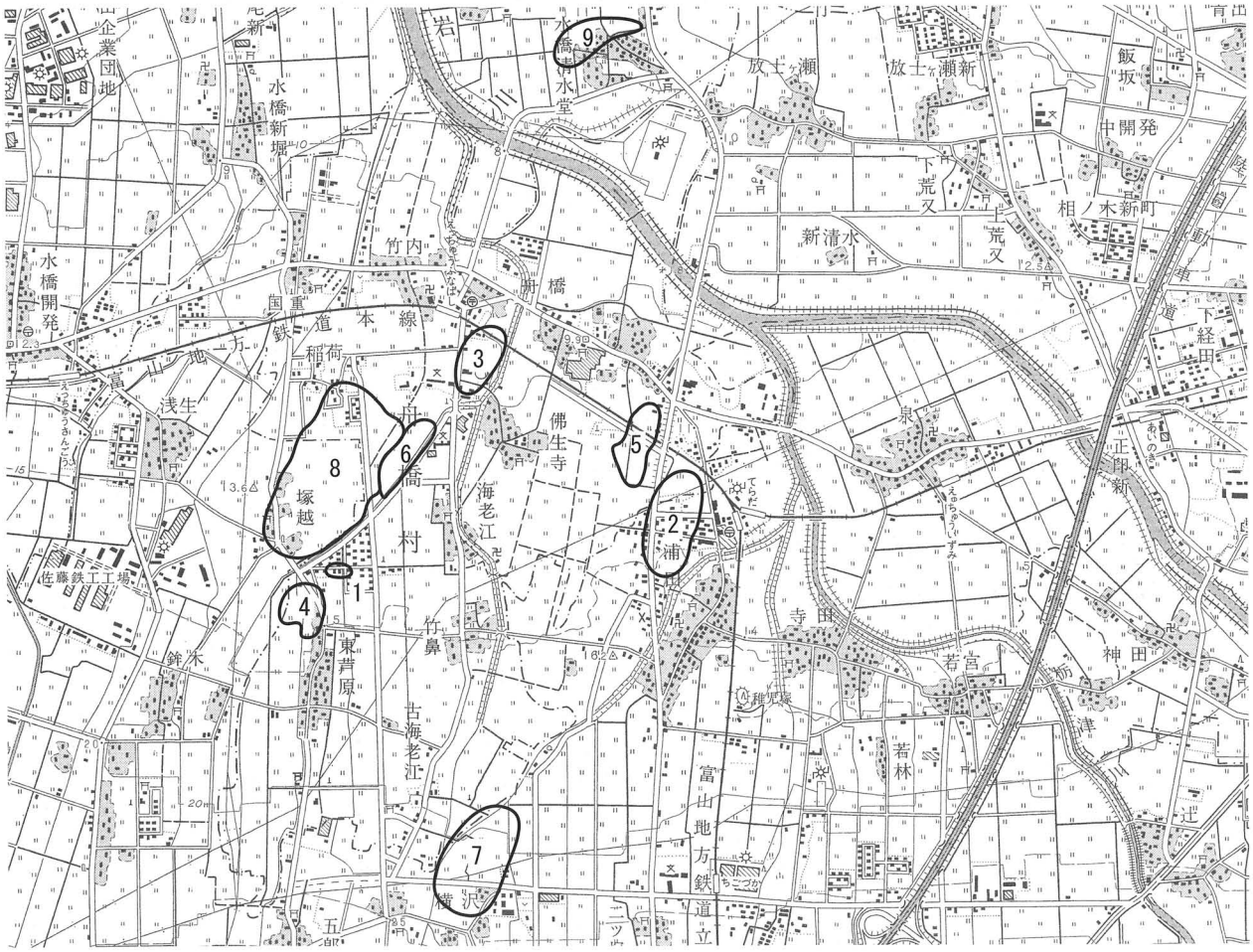
第１章　位置と環境

東芦原西角堂遺跡は舟橋村東芦原に所在する。舟橋村は富山県のほぼ中央に位置し、全国1,800余りの自治の中でも、日本一小さな村として知られている。面積3.47㎢、現在は人口約3,000人に迫まる勢いで増加している。村の東西最大幅は約2.5㎞あり、南北最大の長さは3.8㎞、標高約10～25ｍを測る沖積平野の扇状地上に存在し、周辺に水田が広がっている。舟橋村の北側から北西側は富山市に接し、南側を立山町、北東側で上市町にそれぞれ接する。

舟橋村の北東側には白岩川が流れ、常願寺川の扇状地である。明治43年の地図では白岩川は幾度となく大きく蛇行し、古代の村々も流路の変更により大きな影響を受けていたものと思われる。扇状地端部では遺跡の密度が極めて高い。この地域に遺跡が進出する時期は、これまでの発掘調査結果から縄文時代後期から晩期であり、弥生時代に遺跡数の増加と規模が拡大し開発が進む。その後、古墳時代、古代、中近世と断続しながら広い範囲にわたって遺跡が形成されている。

当遺跡は、富山平野を流れる白岩川の南側1.5㎞に位置し、白岩川の支流細川及び京坪川の段丘上にあり、標高は約13.5ｍの水田に立地している。ほ場整備前はかなり樹枝状に小河川が入り組んだ地形をなしていたと思われる。ほ場整備が完了した現在は大区画の水田となっていて、旧地形を留めた微地形は窺えない。遺跡の周囲には、民家や近年建てられた団地などが北・東側にある。

舟橋村の南側標高約35ｍから北側標高約10ｍまでの遺跡分布密度は、周辺の地区に比べて高い。



1．東芦原西角堂遺跡　2．浦田遺跡　3．仏生寺城跡　4．東芦原遺跡　5．小平遺跡　6．竹内東芦原遺跡　7．横沢Ⅰ遺跡
8．塚越Ⅰ遺跡　9．清水堂Ｂ遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

東芦原西角堂遺跡の東方1.3kmには浦田遺跡があり、遺跡は立山町にも広がっている。団地造成に先立ち平成９～11年度にかけ調査されている。主な遺物は、弥生時代中期であり、河跡から遺物が多く埋蔵し中でも河道から多く出土している。この他の遺構では弥生時代後期末頃の井堰や古代の住居跡、中世前期の方形溝に囲まれた建物群などが検出されている『高梨ほか2000』。北方1.2kmには仏生寺城跡が存在し、遺跡からは古墳時代初め頃とされる２棟の住居跡があるほかに、15世紀前半以降の時期にあたる築城時の遺物や、城の最盛期に当たる15世紀代の遺構・遺物が検出されている『高梨ほか2001』。同書に掲載された高岡徹氏による城跡の復元図では、南北200ｍの主郭と副郭が堀を挟んで配置されている。また、北方0.35ｍには竹内東芦原遺跡が位置し、河川環境整備事業に伴う平成10～12年度調査では、縄文時代後期の遺物、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡・建物跡等と共に、弥生時代の土器や玉作り関連遺物、炭化した米塊が数個出土している。古墳時代の竈付きの住居跡から土師器と共に円筒形土器の検出があった。

また、当遺跡西側隣接地の東芦原遺跡では宅地造成に伴い平成16・18年度調査において、古墳前期の遺物と中世後半の集落跡が発掘され、掘立柱建物跡・井戸・土坑などが検出されている『前原ほか2005、2007』。

第２章　調査に至る経過

第１節　分布調査

河川と扇状地が村域を占める舟橋村内には多くの遺跡が存在し、これまで開発に先立って遺跡調査が行われてきた。

平成20年度秋には、東芦原字西角堂地内において格納庫及び宅地造成の計画がなされた。業者から舟橋村教育委員会に遺跡の有無の問い合わせがあり、村教育委員会では埋蔵文化財の専門職担当職員が不在のために、遺跡有無の確認調査を富山県埋蔵文化財センターに依頼した。これを受けて富山県埋蔵文化財センターでは、10月15日に対象地の水田・畑地の分布調査を実施した。その結果、弥生時代、古墳時代、古代～中近世にかけての遺物が採集され、今後の開発にあたり事前に保護措置が必要であるとの見解にいたった。

第２節　試掘調査の概要

試掘調査は、舟橋村教育委員会が富山県埋蔵文化財センターの調査員の派遣を得て、平成20年11月17日～11月18日の二日間行なった。調査対象面積2,955㎡に重機を利用した試掘溝（トレンチ幅約0.7m）を東西方向に任意に６本を

第２図　試掘調査と本調査の位置

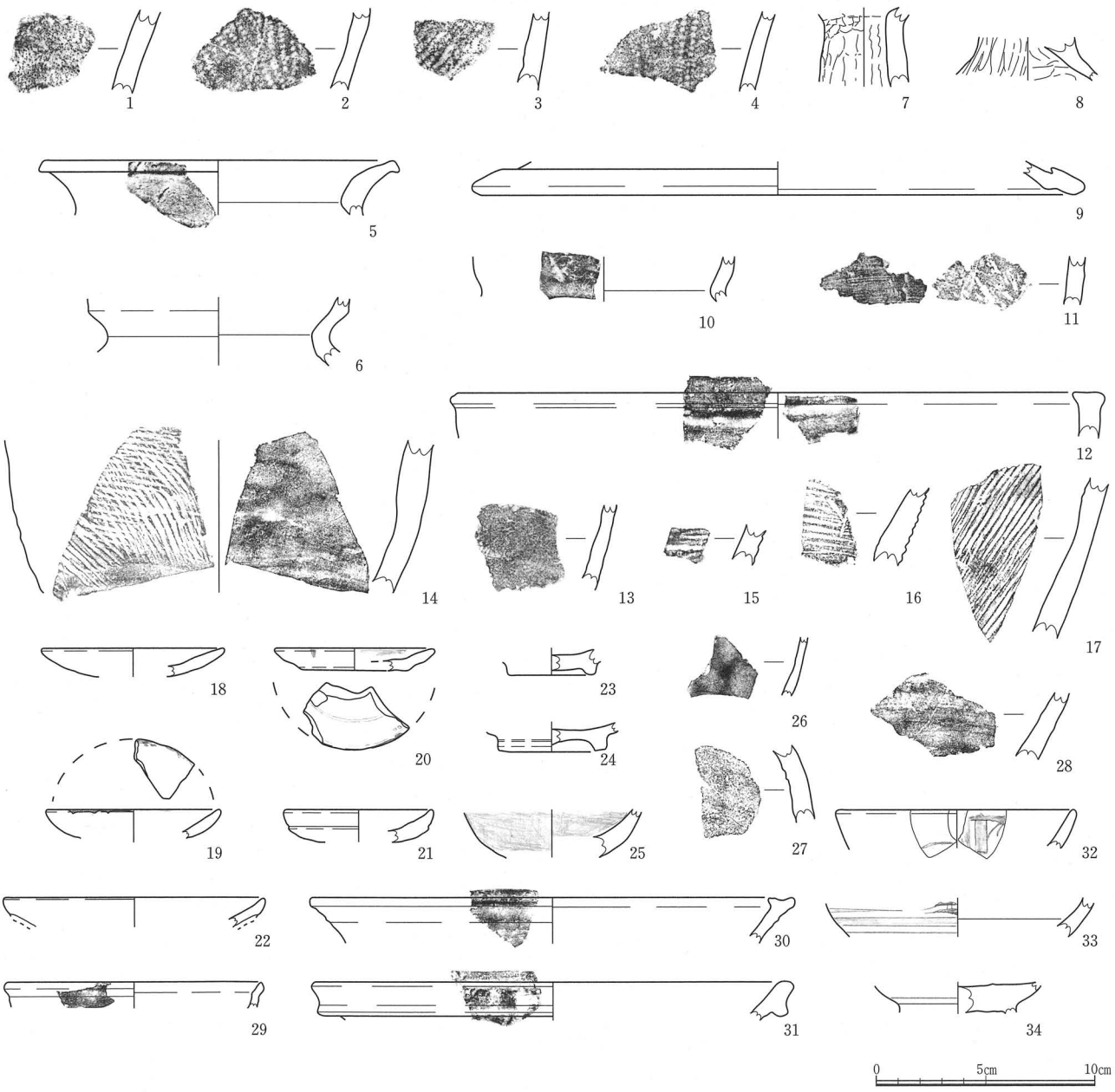
設け、遺構・遺物の遺存状況を確認した。試掘面積は144㎡である。

試掘調査の対象地は、ほ場整備が完了した水田であり、耕作土が約20㎝程の厚さで、その下に盛土が20㎝、更に下に黒褐色の遺物包含層が全域にわたり厚さ10～20㎝で確認できる。調査区の中央には南北方向に向かって旧河川跡（幅約10m、深さ不明）がみられるとの内容であった。また、古代または中世の溝４、柱穴７、土坑４、井戸１などが検出されている。

第３節　試掘調査の出土遺物（第３図）

６本の試掘溝から出土した土器の時期は、縄文時代以降、中近世までにわたっており、各時期のものが断続的に存在する。

１～４は、縄文を施文した土器で文様部分がなく時期は不明である。５～11は、弥生時代後期末頃の土器で、５は「く」の字形に外反する甕口縁部に当たり、６・10は壺の複合口縁部の破片である。７は、高杯の柱状部片で外面を



第３図　試掘調査出土遺物実測図（1/3）

篦磨きする。9は高杯脚部の裾にあたり、8は外面を赤彩した壺の台付き部である。11は外面を刷毛目調整して、内面を篦削りした甕体部片である。13・27は古代の須恵器壺片であるが、器形・時期が不明である。12は小破片で中世の珠洲壺の口縁部であろうか。14～17は中世の珠洲壺体部で、外面に細かい平行叩き痕と合わせ、内面に無文の円形あて具痕が残る。

18～21が土師質の皿である。19・20の口縁部内外面にタール状の油痕が付着し、灯明皿として利用されている。20は内面底部から体部にかけ屈曲する部分に1本の線が巡る。19は口縁部のみであり、21は平底の皿であり、口縁部から体部にかけ1条の段を有しており14～15世紀に属する。

23は瀬戸美濃の碗底部で内面に黒褐色釉がかかっている。30は15世紀の瀬戸美濃の灰釉おろし皿である。

表1　試掘調査出土土器一覧

No.	トレンチ	西から	種　類	時　代	No.	トレンチ	西から	種　類	時　期	No.	トレンチ	西から	種　類	時　期
1	2トレ	30m	縄文土器	縄文	13	6トレ	25m	須恵器壺	古代	25	6トレ	33m	越中瀬戸	18C
2	5トレ	7m	縄文土器	縄文	14	5トレ	17m	珠洲・壺	中世	26	1トレ	4m	京焼	近代
3	6トレ	10m	縄文土器	縄文	15	2トレ	30m	珠洲・壺	中世	27	6トレ	25m	須恵器	古代
4	5トレ	7m	縄文土器	縄文	16	採取	—	珠洲・壺	中世	28	6トレ	16m	越中瀬戸	18C
5	2トレ	1m	甕	弥生末	17	4トレ	22m	珠洲・壺	中世	29	採取	—	越中瀬戸	18C
6	1トレ	17m	壺	弥生末	18	6トレ	40m	土師質皿	15C	30	4トレ	3m	瀬戸美濃	15C
7	1トレ	4m	高杯	弥生末	19	2トレ	30m	土師質皿	14C後半	31	採取	—	越中瀬戸	18C
8	2トレ	25m	台付壺	弥生末	20	5トレ	4m	土師質皿	15C	32	採取	—	磁器・碗	19C～
9	2トレ	32m	高杯	弥生末	21	6トレ	23m	土師質皿	15C	33	4トレ	9m	磁器・碗	19C～
10	5トレ	41m	壺	弥生末	22	6トレ	24m	土師質皿	15C	34	2トレ	32m	磁器・碗	19C～
11	5トレ	—	甕	弥生末	23	採取	—	瀬戸美濃	近世					
12	採集	—	珠洲	中世	24	6トレ	1m	越中瀬戸	近世					

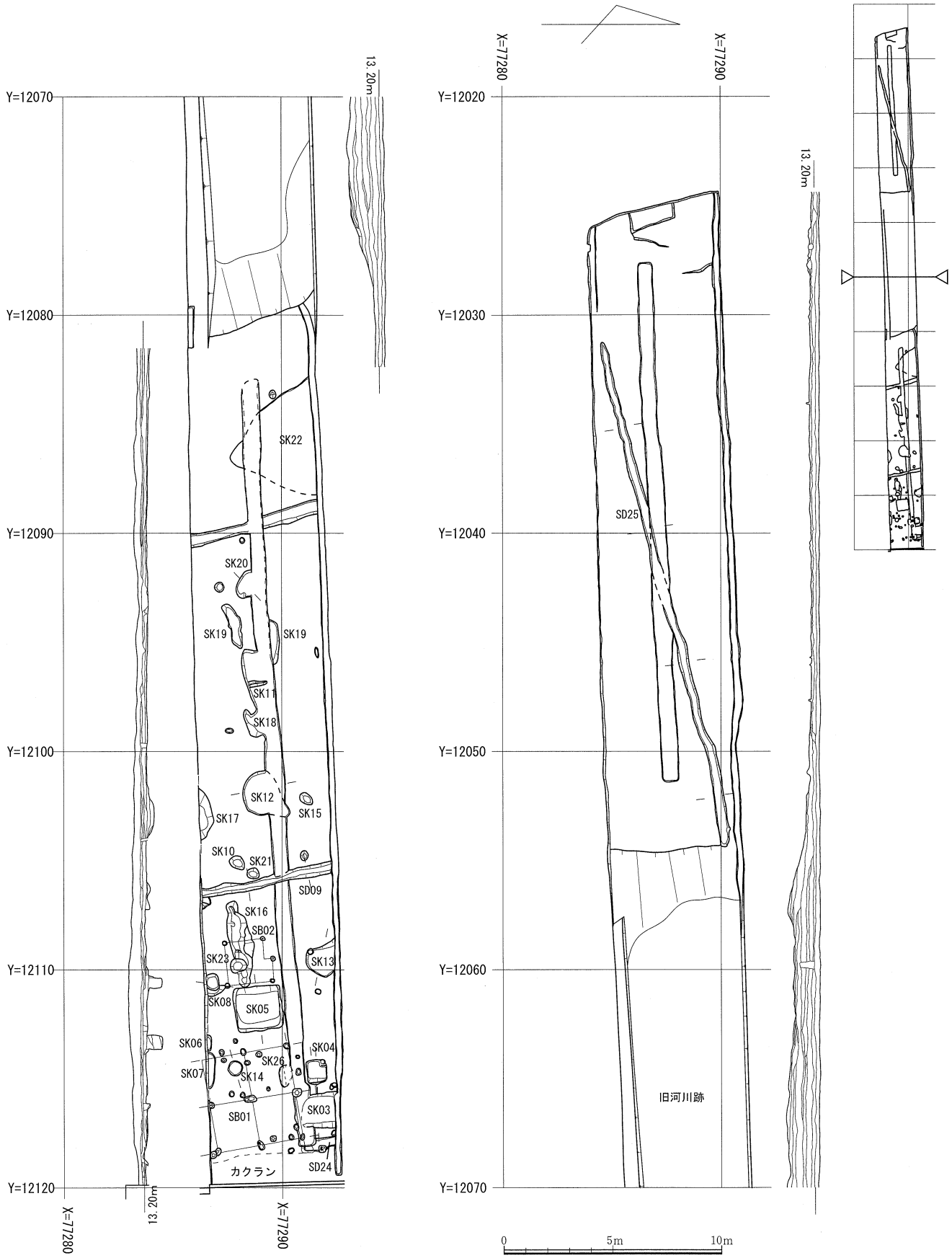
第3章　調査の概要

第1節　調査の方法

協議の結果、本調査は取り付道路部分約600㎡を対象とし、富山県埋蔵文化センター調査員立会のもと重機による表土掘削を西端から東側に向けて行ない、旧河川跡では数cm単位で徐々に掘り下げ遺物の出土がないか確認しながら、下層部の黒色土近くまで掘り下げた。表土の排土に伴う遺物は、ほ場整備時の削平もあり下層黒色土からの出土は極めて少なかった。

表土除去後調査区に、国土座標（世界測地系）に基づき基準杭を東西10m間隔に、横幅6mの調査区両側に基準杭を打ち、調査区の西側隅がX軸・Y軸の基点「0」となるようにした。2m四方を1単位とするグリッドをもとに南北をX軸1～3区、東西をY軸48区を設定した。遺構検出を行なった後に遺構概略図を作成し、順次遺構番号を付けた。遺構検出時には写真撮影を行ない、その後にセクションベルトを設け遺構の掘削を行なった。本書では凡例に記したように、座標をX・Y軸の下3桁で表示していく。

調査の工程はまず、旧河川跡が横切るY055付近から遺物の有無を見ながら掘り下げを行なったが、新たにまとまった遺物の出土はなく、黒褐色の下層には葦やヨシ類の植物腐植層が5～10cmの厚さで河川跡全体に堆積し、この腐植土層には全く遺物の混入がなく下層は礫層に達した。最も深い所はY058周辺が表土から河底まで約1.7mに達した。河跡両側は緩やかな勾配で河床にいたる。河の上端幅が26mで、下端幅が19mと調区全体の約1／4を占めている。遺構の密度は、西側は溝SD25の1条のみと希薄であり、逆に東側に向かう程濃密で、掘立柱跡数の分布も現在の河の側道や東の団地側にまで広がって集落が存在していたと想定できる。



第４図　遺構全体図と断面図（Ｓ＝1/250）

作業工程は以下のとおりである。基準杭に沿った１m方眼（水糸張りによる）を作成して手測量による１／20発掘区及び遺構平面図の作成、平面図へのレベル表記を行ない、ＳＫ04・23では１／10の木製品出土状況図の作成、レベル記録と番号付けを行ない、木製品を取り上げた。記録作成後に水糸と釘の回収、発掘機材を徹去し調査を終了した。

第２節　各遺構の概要

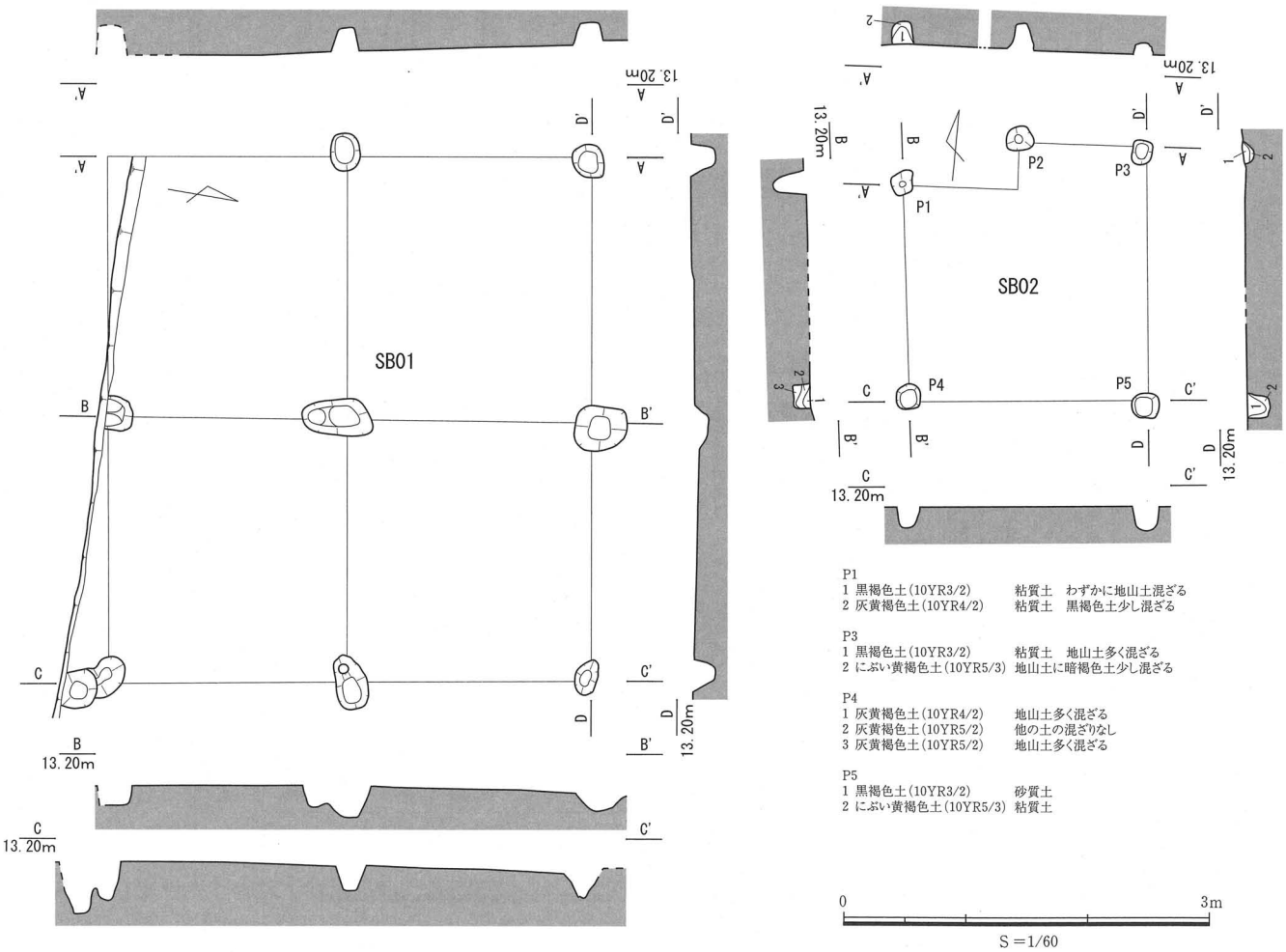
今回の調査で検出した遺構は、中世の遺物の検出できた土坑、遺物の伴わない近世の遺構がある。遺構の種類は掘立柱建物跡２棟、土坑21、溝３条、柱穴状小ピット群である。この内、遺物を伴う遺構は、土坑内からの出土が７箇所と少なく、多くの遺構は遺物が共伴しないために明確な時期がはっきりしないが、遺構の覆土の類似性や包含層の遺物や周辺の採集品から中世に所属すると推定される。

遺物包含層は表土下に近世や中世の遺物が若干点在し、旧河川でも西側肩部から河への傾斜部上層から16世紀の越中瀬戸皿１点の出土があり、河への傾斜面から10cm余り上層の黒色土層中より、２箇所約8.4m隔てて別々に縄文時代晩期の土器（第８図35・36）が出土した。周辺にまったく他の遺物は存在しない。

以下、各遺構の説明を行なう（表２～４参照）。

（１）掘立柱建物（第５図）

建物は２棟があり、柱穴群は調査区の東端側に多く存在し、何回かの建て替えと調査区外にも広がっていて、遺跡の中心に建物群があったことがわかる。柱穴の大きさは直径約0.3m、深さは最も深いもので0.3m、平均0.15～0.2mである。



第５図　掘立柱建物ＳＢ01・02平面図と断面図（Ｓ＝1/60）

ＳＢ01（第５図）

Ｙ114～118の建物群東端に存在する２間×２間の東西棟の建物であり、床面積16.34㎡で、真北に対し80度東に振れている。床中央にも柱穴があり総柱建物である。柱間寸法は桁行が2.15m間隔で、梁行は1.9m間隔である。柱穴の掘り方は0.2m余りと丸いもので、深さが0.15～0.2mである。柱痕は残っていない。柱穴断面の土層の相違から柱は直径0.15mほどと想定される。柱穴からの遺物の出土はない。

ＳＢ02（第５図）

ＳＢ01の西側３m隔てたＹ108～111に建てられており、１間×１間の東西棟の建物である。桁行方向は真北に対し、84度東に振れる。柱間は桁行・梁行ともに1.9mの規模であり、北東隅側に幅0.3mで、長さ1.1mの張出し部を付けており、床面積は約4.0㎡である。柱穴は直径0.2mほどで、深さが0.15mであり、遺物の出土はない。柱穴断面から柱の太さは0.15m程とみられる。

（２）土　坑（第６・７図）

土坑の種類には、平面形が円形で断面が円筒形の直径約0.6m、深さ0.6～0.8m（ＳＫ06・08・14・23）や、平面形が楕円形または不定形な幅・長さが約0.5～0.8mで深さが浅い（ＳＫ10・21）、幅・長さが0.8～1.0mほどで深さが約0.2mと浅いもの（ＳＫ15・18・20）、同様な形で幅・長さが1.5mで深さが0.1～0.2mと浅く、底面が平皿状であるもの（ＳＫ03・13）、幅・長さ２～３mほどで楕円形の浅い（ＳＫ11・12・19）などがあり、遺構の使用目的ははっきりしない。

ＳＫ03（第６図）

調査区の北東隅Ｙ117に存在し、幅1.5mで底面は皿状で浅く、長さも1.5mあり北側は調査区外へのび不明である。出土遺物はない。覆土上層に黒褐色土が厚く、下層に黒色土が薄くあり、深さは最深部で0.22mである。

ＳＫ04（第６図）

Ｙ115にある。ＳＫ03の西側0.4m隔てた位置にあり、ＳＫ03と同じ方向に掘り込まれた遺構である。長さ1.1m、幅0.9mの規模で平面形が隅丸方形となる。深さは土坑周りが0.7mあり、中央では0.78mと深くなる。北西角には後から掘り込まれた柱穴が存在する。１～３・5層は黒色土層で遺物を殆ど含まない層である。７層～９層（厚さ0.5m）にかけて焼けた状態で多数の木製品が底面まで埋まり、土坑下半部に検出できた。しかし、周壁には焼成した痕跡がまったくなく、他の場所で焼かれた木製品や炭化物がこの土坑の使用後にまとめて投げ入れられている。土器は土師質皿と白磁の各２点と少なく、白磁（第８図58）は土坑最下面の中央近くから半分に欠けた状態で出土した。

土坑周囲の地層はＳＫ05と同様の堆積である。

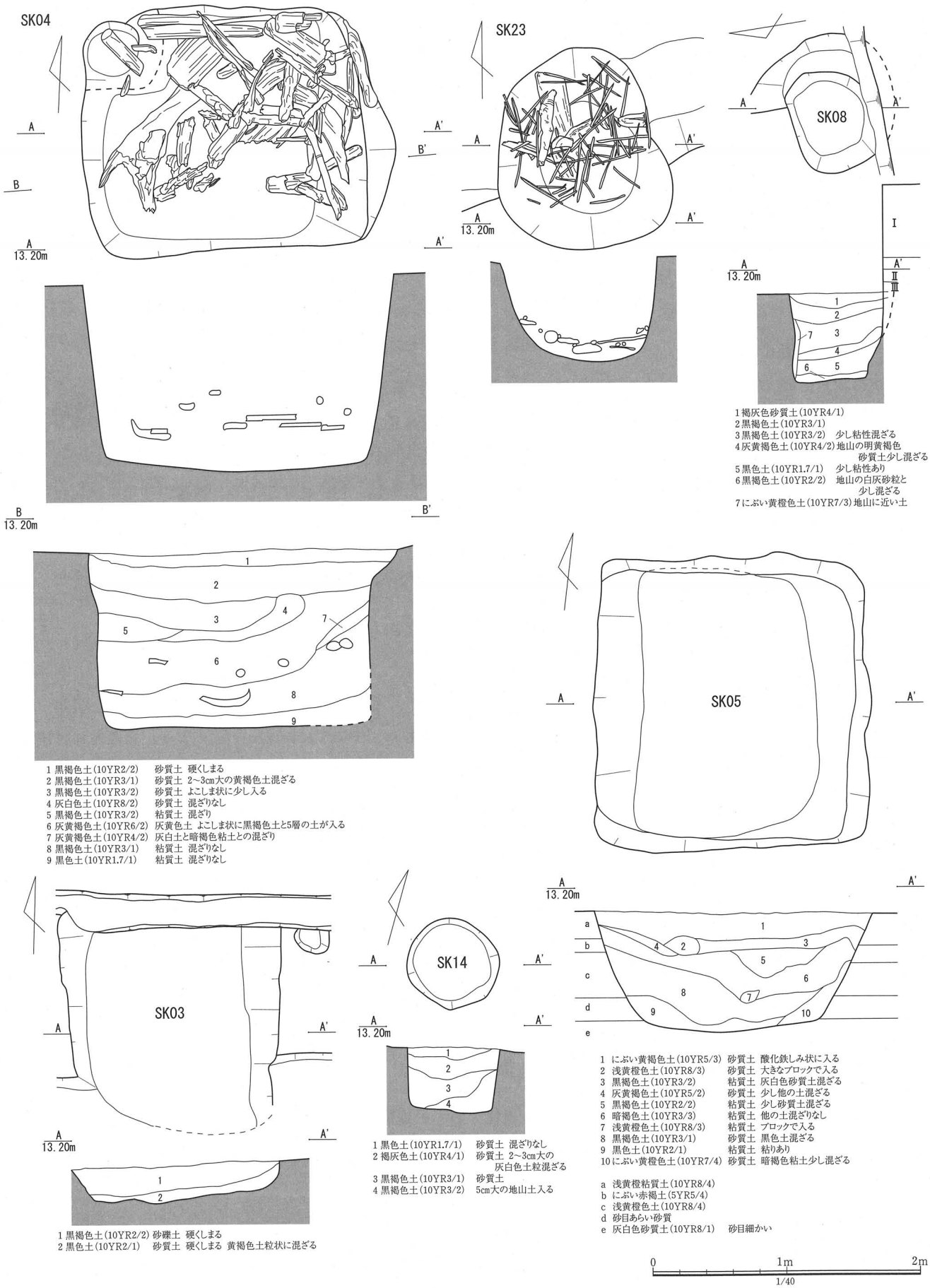
ＳＫ05（第６図）

Ｙ112にある。方形で長さが2.2m、幅が2.0mあり、深さ1.0mほどの大きな土坑である。上層約0.2mは地山土と黄橙色土との混合した土であり、３層には黒褐土が入り、中より0.2～0.25mの割竹が３本見つかった。５・６層は粘質土であり、６層から珠洲甕片（第８図47）と箸状木製品２本（第11図）が出土している。

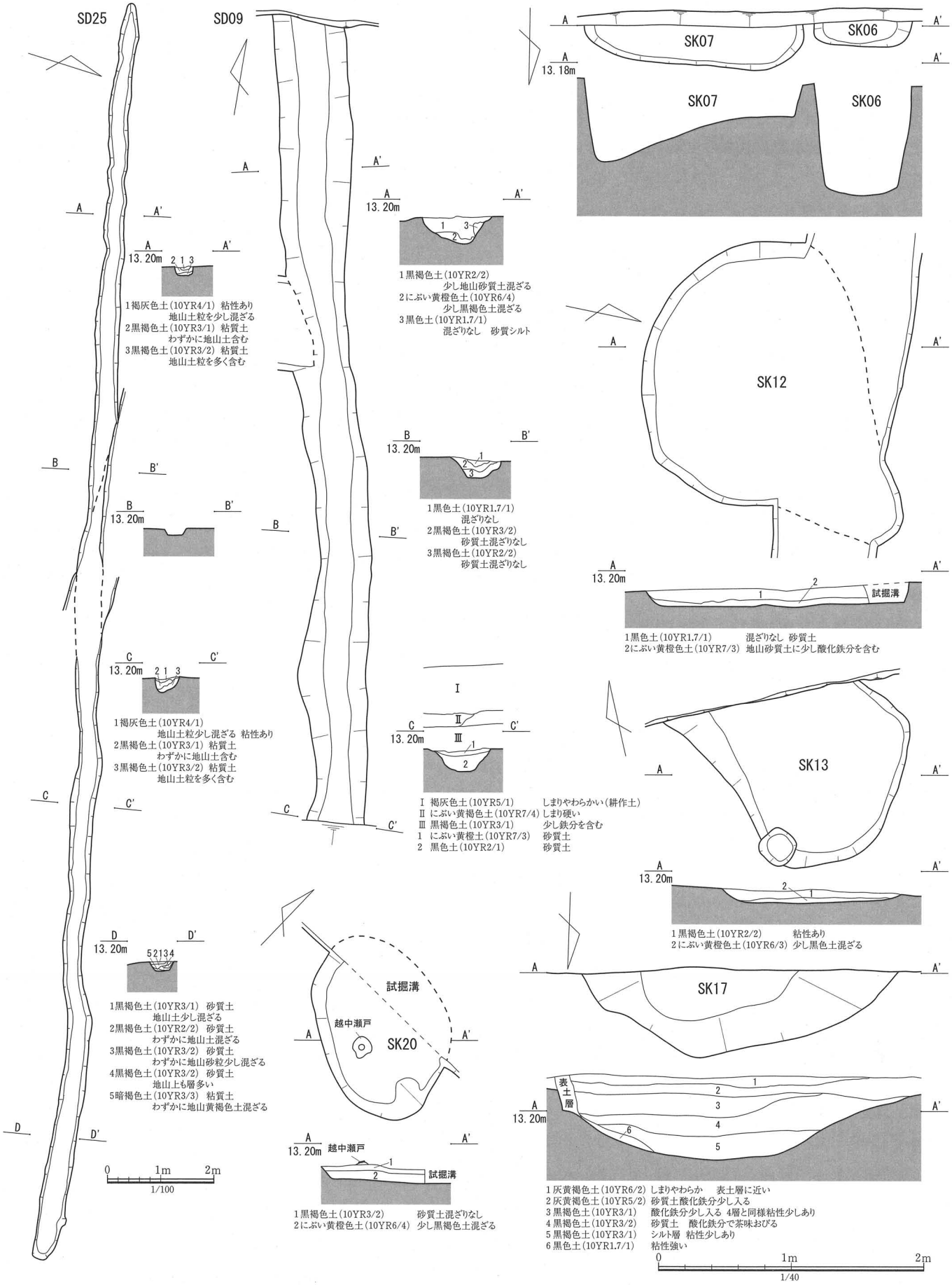
この下層は黒褐色・黒色土が他の遺構同様に存在し、上層は異なっていることから撹乱を受けた土の混入があるかもしれない。東西方向の底面は「Ｕ」字状となる。遺構の周りの地層は0.6m以下が砂層になっていて水の浸透がある。

ＳＫ06（第７図）

Ｙ114南端にある。調査区内では0.2m検出し、幅が0.6mで深さが0.9mで円筒形の断面である。覆土の上層0.3m余りが黒褐色土であり中に少し地山土粒を含む。その下層が主に黒褐色土に覆われている。



第6図　遺構平面図と断面図



第７図　遺構平面図と断面図

SK07（第7図）

Y115にある。SK06に東側に隣接し存在する。調査区内では幅0.3mを検出し、覆土は地山土の黄褐色土と灰褐色土と鉄分の混ざる土で、深さ0.3mであり、他の遺構の土と異なり時期が更に下るものとみられる。出土遺物はない。

SK08（第6図）

Y111にある。直径が約0.8mの断面が円筒形の土坑で、深さ0.66mである。2層以下は主に黒褐色土であり、3層中で珠洲と箸状木製品数本の出土を確認している。

SK10

Y106にある土坑であり、平面は楕円形である。覆土は黒褐色で、長さが0.75m、幅は0.58mあり、深さが0.06mと浅く掘り込む。出土遺物はない。

SK11

Y096～098にある。SK11・18・19・20は試掘溝を囲んで東西7.5m、南北2mの間にまとまって存在し、平面形も不定形である。掘り方も深さ0.22mと浅く土坑の掘られた性格がはっきりしないが、風倒木痕の可能性も考えられる。土坑の長さは1.4～2.0mで、幅は0.5～1.0m余りで先の範囲に集中している。なお、SK20の土坑の上面から越中瀬戸皿1個が出土しており、他の土坑からの遺物の出土がなく、一連の遺構とすれば皿の年代が17世紀前半頃であり、近い時期が考えられる。

SK12（第7図）

Y103にある。平面が楕円形で長さが2.5m、幅が0.8m程で深さ0.1mと浅い平坦な底の土坑である。覆土は、1層が黒褐色土0.1m、2層に地山土がわずかに入る。出土遺物はない。

SK13（第7図）

Y110にある。深さ0.1mの浅い皿状の底面で長さと幅が約1.2mの大きさである。上層に黒褐色土が水平に堆積し、その下層には地山土の混ざる土層であり、出土遺物はない。

SK14（第6図）

Y115にある。直径が0.57m、深さが0.42mの土坑である。上層の厚さ0.1mが黒色土であり、その下層に褐灰色土さらに底面にかけ黒褐色土が堆積しているが、出土遺物はない。

SK15

Y103にある。大きさが0.6×0.55mと小さく、深さ0.14mと浅い。上部のみに黒褐色土が薄くかぶり、下に黄橙色土で覆われる。出土遺物はない。

SK16

Y107～111にある。長さが1.5m余りで、幅1.1mの不定形な平面をなし、深さ0.22～0.28mの細長い土坑である。覆土は黒色土で、出土遺物はない。

SK17（第7図）

Y103～104南端にあり調査区外に広がる。長さが2.5mで幅が調査区内で0.65mと楕円形の平面になると思われる。深さが0.52mあり、6層に区分される。上部2層は灰黄褐色土、下層の4層は黒褐色土がほぼ水平に埋まっていたが出土遺物はない。

SK18

Y099にある。長さが1.4mで、幅は試掘溝で分断されているため推定0.9mで楕円形になると見られる。深さは0.28mで、下層は0.08mの地山土との混土層となる。出土遺物はない。

SK19

Y096にあり、長さが1.9mで幅0.6mの平面が不定形である。深さは0.16mと浅く遺物の出土はない。土層は北側に

黄橙色土があり、南側に暗褐色土・褐灰色土となり、下層は黒褐色土と細かく分かれ、風倒木痕のような土層の逆変化がある。

ＳＫ20（第７図）

Ｙ093にあり、長さ1.2m程で試掘溝によって削除を受けており、0.7mが残るが推定１m程と思われる。深さは0.22mあり、上層の0.04mは黒褐色土で下層には地山土との混合土が入る。土坑の西寄り上面には越中瀬戸の皿１個（第８図62）が出土した。

ＳＫ21

Ｙ106にあり、小円形で0.6×0.55mの大きさで、深さ0.1mと浅く黒褐色土で埋まっていた。出土遺物はない。

ＳＫ22

Ｙ084～086にあって調査区では平面三角形で覆土が平均0.1m程の厚さで広がっていた。調査区北壁で長さ5.35m、東西幅が3.85mである。覆土は全般に浅く、上層に黒褐色土が0.05m堆積し、その下層ににぶい黄褐色土と地山土が混ざり、0.15mの厚さで覆われていた。出土遺物は土師質土器細片２点が出土している（第８図55）。

ＳＫ23（第６図）

Ｙ110にあってＳＫ16と重複し、断面の切り合い関係からＳＫ16より古く掘り込まれた土坑である。平面が楕円形であり、大きさは0.75×0.6mで、深さがＳＫ16遺構検出面からＳＫ23の底部まで0.55m、上層の0.05～0.25mはＳＫ16の覆土である。黒色土が上部にあり中間層に灰黄褐色土やにぶい黄褐色土があり、更に0.25mの黒褐色土が堆積し、最下層の0.07～0.10mは箸状木製品（第12・13図）の多量に含む黒褐色粘質土であった。土坑周囲の土質は荒い砂質土であった。遺物出土状況は第６図のように規則性は見られない。土師質皿が１点出土している（第８図60）。

ＳＫ26

Ｙ115にあって、覆土は厚さ0.08～0.12mの土坑である。平面は楕円形で0.9m×0.6mの大きさで、出土遺物はない。

（３）溝（第４・７図）

調査区中央を横切る旧河川跡の西側で１条と、東側Ｙ107・108とＹ118に２条を検出している。

ＳＤ09（第７図）

Ｙ106～107にあり幅6.0mの調査区を南北方向に横切る直線的な溝で、幅0.6m、深さは0.12～0.15mと北側がわずかに深くなっている。覆土は黒褐色土と黒色土であり、溝の一部崩れた所に違う土質が混入している。出土遺物はない。

ＳＤ24（第４図）

Ｙ118北側に位置し調査区外へ続く。長さ0.6m、幅が0.4～0.5mで、深さがわずか0.05mである。出土遺物はない。

ＳＤ25（第７図）

Ｙ032～055にかけ直線的に東西方向に伸びた長さ21.8m、幅が0.35～0.5mの溝であり、深さ0.1～0.12mと浅く東側にむかい少し深くなっている。溝の覆土は黒色土、黒褐色土が主体であり、所によって他の土の混入で変化がある。出土遺物はなく、溝の時期や使用目的は不明である。

（４）旧河川跡（第４図）

遺構ではないが、土層観察より古くから現状と河幅や流れる方向に大きな相違がなく自然に埋没した河川跡である。調査区内での河幅は東西方向で約25mと広く、耕作土表面から河底まで最も深いところで1.7m、平均1.5mの深さがあり、表土から下層に黒褐色・黒色土の粘質土やシルト層が互層になって薄く水平堆積している。表土より1.1m以下の層には、葦などの植物の腐植土が0.4m程堆積し、最下層の暗褐色砂質にも微細な植物腐植を含んでいる。その下層には拳大の大きさの風化した礫が続き河底となっている。

河跡からの遺物はX288Y059の表土下0.7mほどの深さから近世越中瀬戸（第8図59）1点が出土した。この頃にはかなり埋まっていたようである。またX289Y065では植物腐植土層の上約10cmの黒色土から縄文時代晩期前半の深鉢土器1点（第8図35）が、かなり表面が風化した大型の土器が見つかった。更に8.4m離れたX286Y073の植物腐植土層から10cm程上の黒色土中からも縄文時代晩期の条痕文土器が単独に出土し、またX067Y288の同様の黒色土から長さ20cmほどの割り材加工の木を検出しているが時期は木質の保存状態（遺物写真図版2の3）から中世頃であろうか。

表2　掘立柱建物計測表

遺構名	桁行方向	柱間数 桁×梁	規模　m ×桁(尺)	柱　間　(m)		平面積	棟方向
				桁	梁		
SB01	N—10—W	2×2	4.3×3.8(14尺)	2.15 2.15	1.9 1.9	16.34m²	東西棟
SB02	N—6—W	1×1	1.9×1.9(2.05)	1.9 (0.3)	1.9 (1.1)	3.94m²	東西棟

表3　土坑計測表

遺構No	調査区	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物
SK03	X291Y117	長方形	1.50+	1.5	0.22	—
SK04	X291Y115	方　形	1.1	0.9	0.69～0.78	木製品·箸·白磁·土師質皿
SK05	X289Y112	方　形	2.2	2.0	1.0	木製品·箸·竹·土師質皿
SK06	X287Y114	円　形	0.2	0.6	0.9	土師質皿
SK07	X287Y115	楕円形	1.6	0.3+	0.3	—
SK08	X287Y111	円　形	0.8	0.8	0.66	木製品·箸·珠洲
SK10	X288Y106	楕円形	0.75	0.58	0.06	—
SK11	X288Y096～098	不定形	1.4～2.0	0.5～1.0	0.22	—
SK12	X288Y103	楕円形	2.5	0.8	0.1	—
SK13	X292Y110	不定形	1.2	1.2+	0.1	—
SK14	X288Y115	円　形	0.57	0.57	0.42	—
SK15	X291Y103	楕円形	0.6	0.55	0.14	—
SK16	X288Y107～111	不定形	1.0+0.5	1.1	0.22～0.28	—
SK17	X286Y103～104	楕円形	2.5	0.65+	0.52	—
SK18	X288Y099	楕円形	1.4	0.7+0.25	0.28	—
SK19	X287Y096	楕円形	1.9	0.6	0.16	—
SK20	X288Y093	楕円形	1.2	0.7+0.3	0.22	越中瀬戸皿
SK21	X288Y106	円　形	0.6	0.55	0.1	—
SK22	X287～112 Y084～086	三角形	5.35	3.85	0.2	—
SK23	X287Y110	楕円形	0.75	0.6	0.55	箸·板·土師質皿
SK26	X290Y115	楕円形	0.9	0.6	0.08～0.12	—

表4　溝計測表

SD09	X286～292 Y106～107	底皿形	6.0+	0.6	0.12～0.15	—
SD24	X292Y118	底皿形	0.6	0.4～0.5	0.05	—
SD25	X284～290 Y032～055	底皿形	21.8	0.35～0.5	0.1～0.12	—

第３節　出土遺物（第８図）

（１）縄文時代の土器

35・36は旧河川跡出土で、35は縄文時代晩期前半の御経塚式土器で胴径30cmの深鉢で、体部がもう少し膨らむ器形かもしれない。土器の口縁部と底部を欠き、器高30cmが残り、深鉢全体の約１／4の破片である。文様は上端より平行沈線を挟んだ細い縄文帯と、体上部に幅９cmの平行線と三叉文で縦方向の線で縄文施文と無文の細長い区画を組み合わせた文様で、体部の下半はＲＬの単節縄文を転がしている。36は、35の南東約8.4m隔て同じ深さから出土した縄文晩期の土器である。口唇部は丸みをもって外面に少しはみ出すように指先で軽く押さえている。外面には上部を横方向に、その下を斜め方向の条痕文で器面調整し、内面は横位の条線をわずかに残している。口縁部直径は36cmと大きく下半が小さくすぼんで底部にいたる。37～42は包含層出土で地山面近くの黒色土から出土している。いずれも小さな破片であり、37・38は斜め方向に短い沈線と磨消縄文があり、時期はおおまかに後期末頃であろうか。39～42は縄文のみを転がした破片であり、43がＬＲの単節縄文を施文している。44は条痕文の破片であり、詳細な時期が不明である。

（２）弥生時代から古代の土器

45は弥生時代または古墳時代初め頃の甕体部で、外面に刷毛目、内面に篦削りをおこなう。53・54は古代の須恵器で、53は壺の上部片、54は無高台の杯底部である。

（３）中世の土器

46～52は珠洲である。48・49・51の３点がすり鉢であり、48・49は珠洲編年『吉岡 1994』のⅡないしⅢ期（13世紀）に当たり、48は口縁部の厚さに変化がなく、内面のおろし目も間隔がある。51は内面のおろし目が間隔を空けず施されⅣ期（14世紀）以降に下る。46・50・52は外面にタタキ目がある甕片であり、叩き具の間隔が細かく古い様相がある。47は叩き具の間隔が荒く時期のⅣ～Ⅴ期に下る新しいものである。

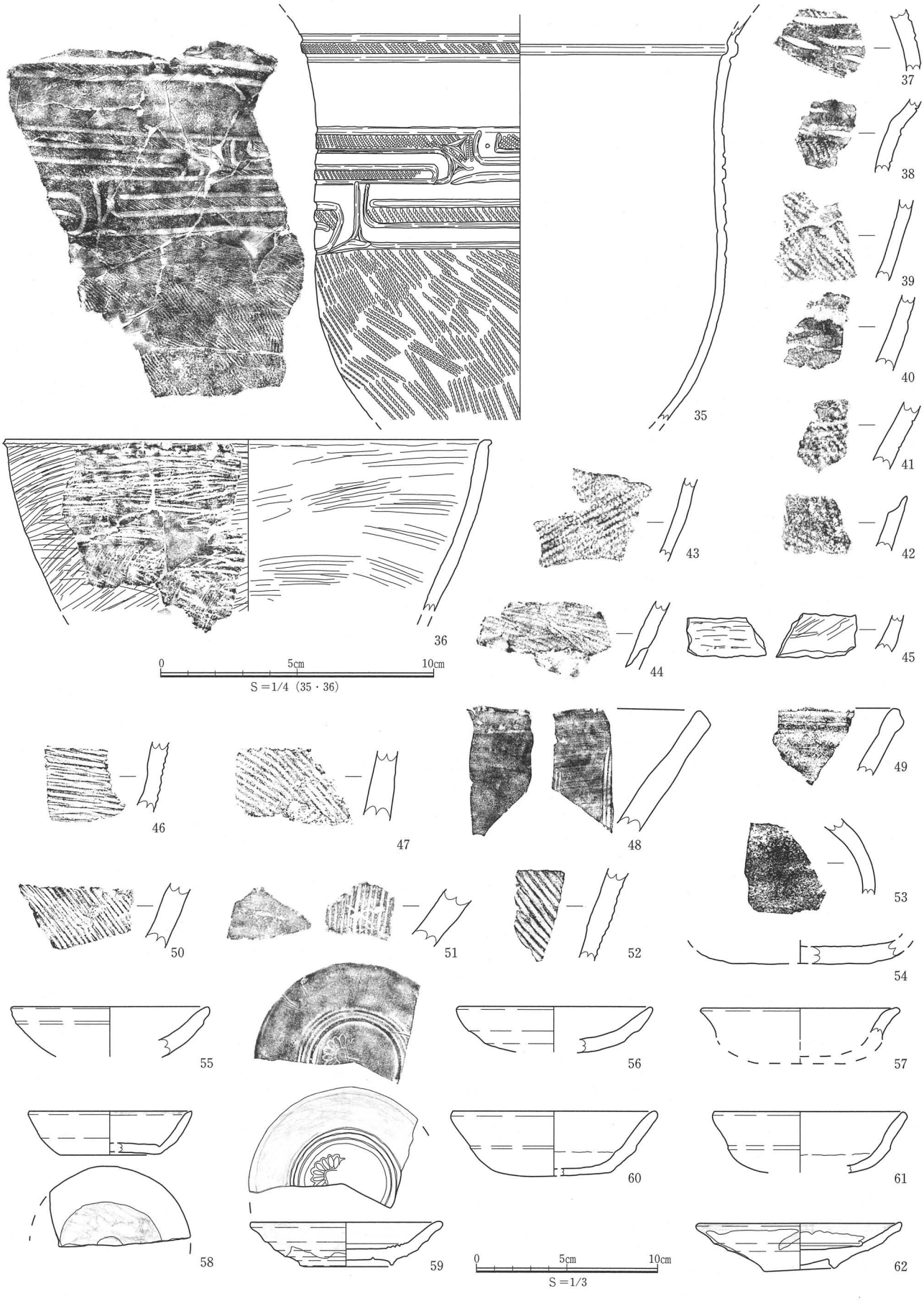
55～57・60・61は土師質皿であり、55は丸底となるもので、15～16世紀にかけての時期である。56・57・60・61は外面下半に横なでし、底部との境を有段とした14世紀後半にかけてのものである。58の白磁は乳灰白色のもので、口縁部に茶色の口ハゲが巡り、外底面は無釉のもので13世紀代に遡るとみられる。

（４）近世の土器

近世の土器は少ない。59・62は越中瀬戸であり、59は内底面に菊花文を押しあて３重の沈線が回り、沈線から口縁部及び外面の上半に緑の釉薬をかけた皿で、16世紀末から17世紀前半の時期にあたる。62は茶褐色の鉄釉を口縁部中心にかけた17世紀後半の皿である。この他に越中瀬戸では内外面に糸切痕を有する直径11.8cmで、厚さ1.5cmのサヤ鉢の蓋がある。また近代の磁器の碗片数点が出土している。

表５　本調査出土土器一覧

No.	出土区	種　類	時　期	No.	出土区	種　類	時　期	No.	出土区	種　類	時　期
35	X281Y061	縄文土器	晩期前半	45	X286Y081	弥生土器	後期?	55	SK22	土師質皿	15C後半
36	X286Y073	縄文土器	晩期	46	X285Y072	珠洲・甕	14･15C頃	56	表採	土師質皿	14C後半
37	X285Y047	縄文土器	後期末	47	SK05	珠洲・甕	14･15C頃	57	X289Y059	土師質皿	14C後半
38	X285Y047	縄文土器	後期末	48	X287Y118	珠洲・鉢	13後半~14C	58	SK04	白磁	13C
39	X285Y061	縄文土器	後･晩期	49	SK06	珠洲・鉢	14C頃	59	X287Y056	越中瀬戸皿	16C末~17C前半
40	X286Y073	縄文土器	後･晩期	50	X286Y073	珠洲・壺	14･15C頃	60	SK23	土師質皿	14C後半
41	X286Y062	縄文土器	後･晩期	51	X286Y058	珠洲・鉢	16C頃	61	SK06	土師質皿	14後半~15C
42	X286Y073	縄文土器	後･晩期	52	X286Y082	珠洲・壺	14･15C頃	62	SK20	越中瀬戸皿	17C後半
43	X285Y047	縄文土器	後･晩期	53	X285Y047	須恵器・壺	8C～9C				
44	X285Y047	縄文土器	後期?	54	X286Y073	須恵器・杯	8C～9C				



第８図　出土遺物実測図（35・36は1/4　他は1/3）

（５）中世の木製品（第10図～13図）

建物群の存在する地区に集中し、木製品は土坑ＳＫ04・05・08・23の４箇所から出土している。これらの遺構検出面から底面までの深さが0.66～0.9ｍと浅いが、遺構の下部地層は砂質土に達しており、調査時に土坑底面からわずかな水が浸み出していた。いずれも素掘りであり井戸側の痕跡を示す側板材が出ていない。しかし遺構の覆土が黒褐色土粘土であり、浸透水と土質が粘質土だったことが木製品の保存に適していた理由と考えられる。箸状木製品は両端が細く、中央部が最も太く、本と末の区別がない加工である。長さは16.5～24.5㎝で木目から杉などの白木を使用している。

ＳＫ04（第10・11図１～16）

土坑の中程の深さから底面にかけ、焼けた痕跡をもつ板材が多数出土した。製品では箸状木製品５本（１～５）、曲物底板（６）１枚で直径30㎝、厚さ８㎜の半月状で欠損部が焼失している。底板２箇所に留め穴痕がある。８は直径10㎝ほど黒色漆器椀の破片である。12は両側が三角形に削られた板材で折敷の底板であろうか。一面に直線の細い刃物跡が数多く残りまな板として利用されている。10は断面が四角形で焼け焦げた棒状のもので、７・９・11・14・15は厚さ５～８㎜の焼けた板材であり、13・16は割材であるが表面の厚さが均一でなく凹凸で、少し焼け焦げた部分がある。土器は58（第８図）の白磁（13世紀）１点が底部中央から出ている。この他にも焼けて黒くなった細かな板材や薄い板などと炭化物が多く出土している。

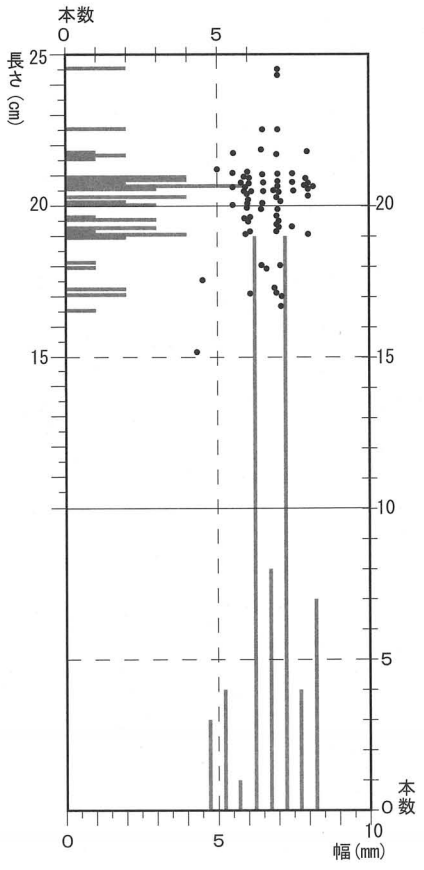
井戸の廃棄に伴い焼け焦げた板材が多く投げ込まれた例は、富山市八町遺跡『鹿島ほか2008』のＤ～Ｇ地区で検出された井戸ＳＥ16がある。井戸は楕円形をした大きさ1.1×0.84ｍの規模があり、深さが1.46ｍある。井戸の最底面からの中世土師器・漆器・曲物・木製品・石製品が出土している。遺物の中には完全に被熱し炭化した木材も多く存在する。これらの遺物は井戸の使用後に廃棄されたと考えられている。また竹の筒が出ていて井戸廃絶に伴う祭祀が行なわれ息抜きのための竹筒であった可能性を示している。土師質皿は油煙が付着し灯火器に使用されており13世紀後半から14世紀前半の時期とされる。焼けた板材が土坑・井戸に廃棄される例は少なく目的が不明である。

ＳＫ05（第11図17～20）

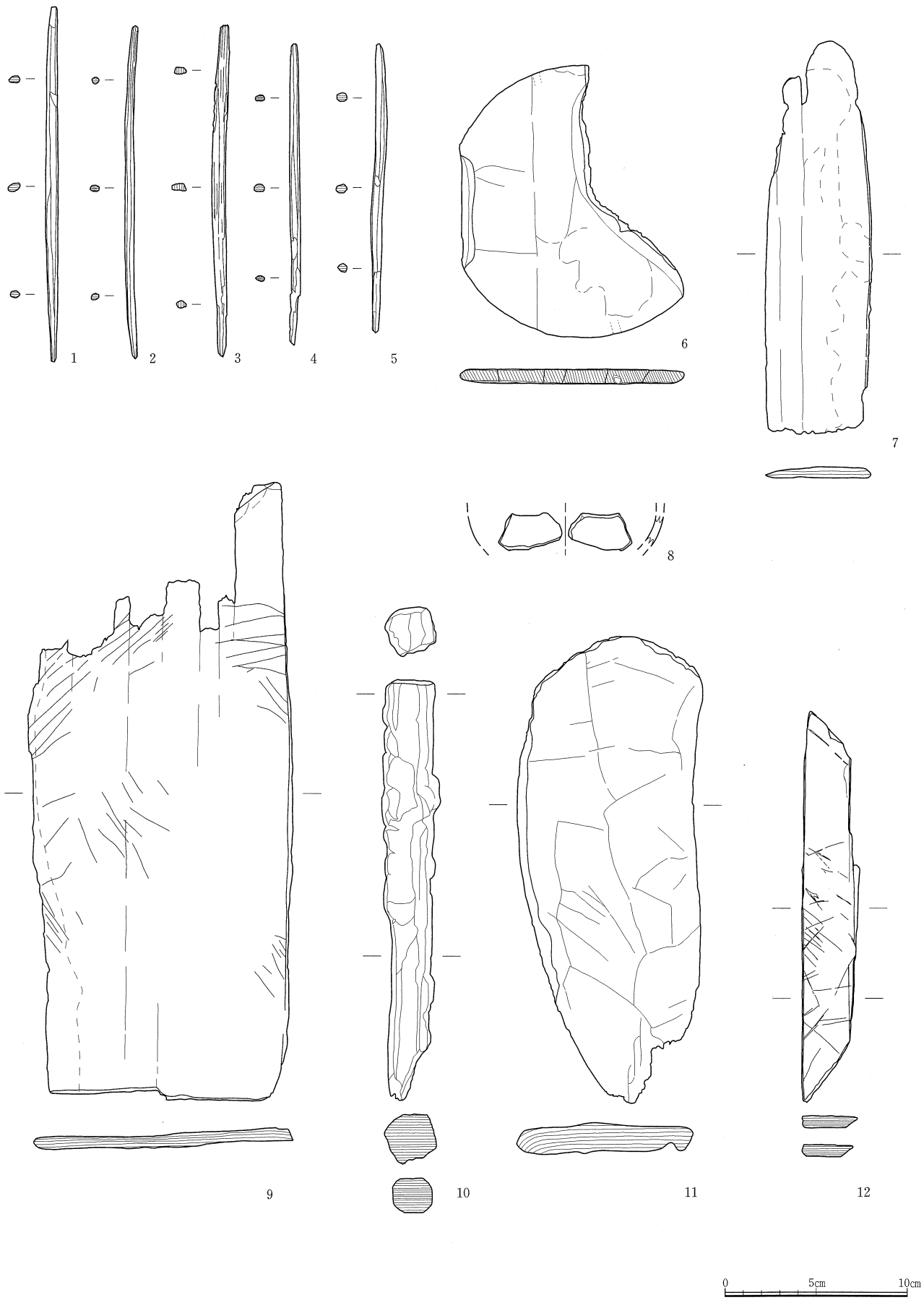
素掘りの大型土坑で、その中程の深さから17～20の割れた竹等の断片４点が出土した。18の竹表面にはこまかな直線状の刃物傷が多くついている。19・20は竹の出土近くから先端が尖った箸状木製品が２本出土している。

ＳＫ23（第12・13図21～81）

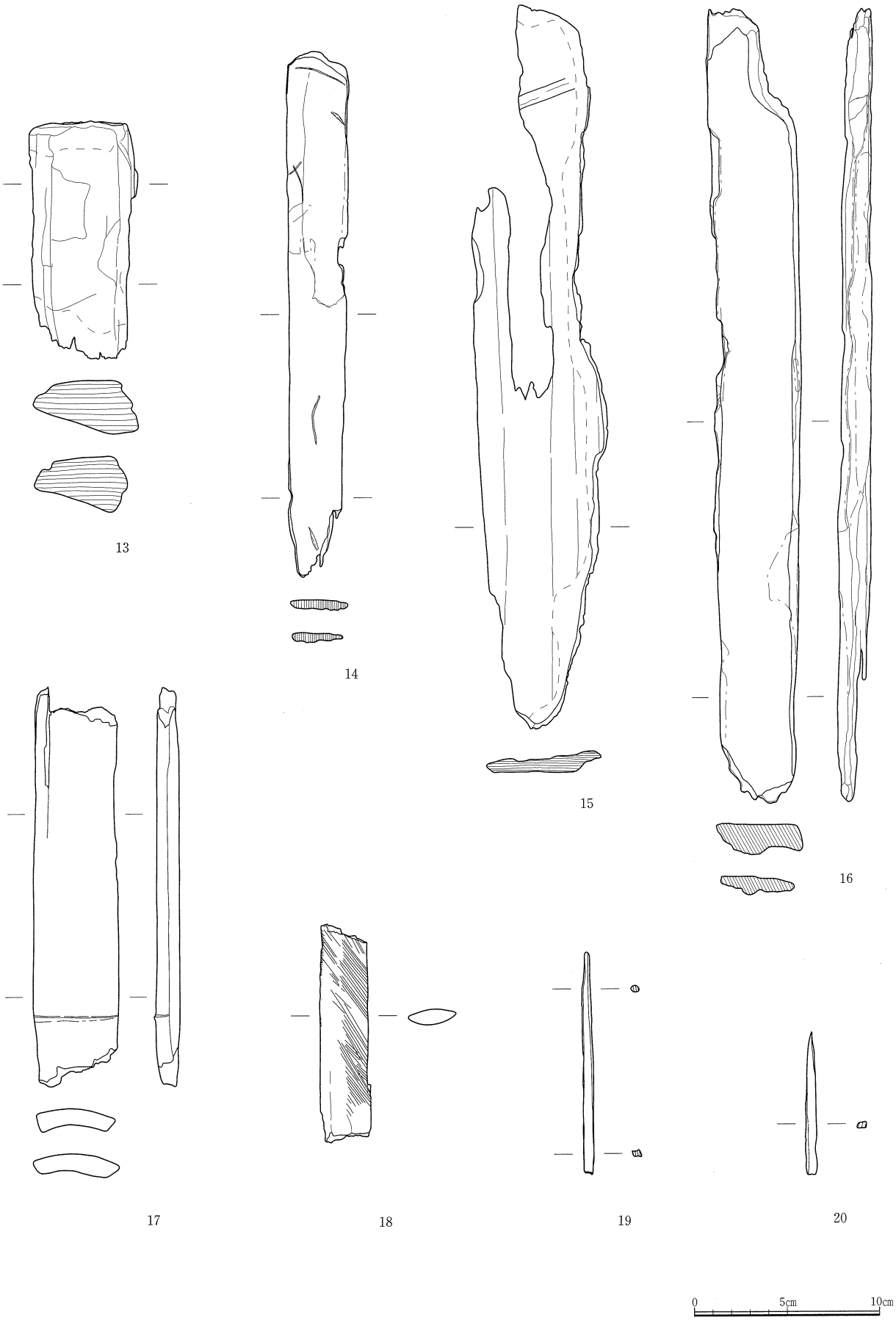
土坑の底から20㎝程上方から底面まで箸状木製品完形70本と、長さが３／４程を残す20本、それ以下の長さの箸片が52本の合わせて142本が混ざって出土した。箸状木製品のほかに板材が４点出土している。板材は４点と少なく、21の板は長さが43㎝で幅5.5㎝の大きさで、最大の厚さが1.0㎝で片方が薄くなっている。用途は不明である。22・23は幅が２～３㎝の厚さ1.0㎝の短い板である。箸の両端は細く削り、中央部幅が５～８㎜で、６㎜と７㎜が最も多い。長さは17～24㎝と幅はあるが、19～21㎝のものが最も多く、加工が簡単な白木の杉などの針葉樹が用いられている。多くの箸状木製品と14世紀の土師質皿１点が出土している。



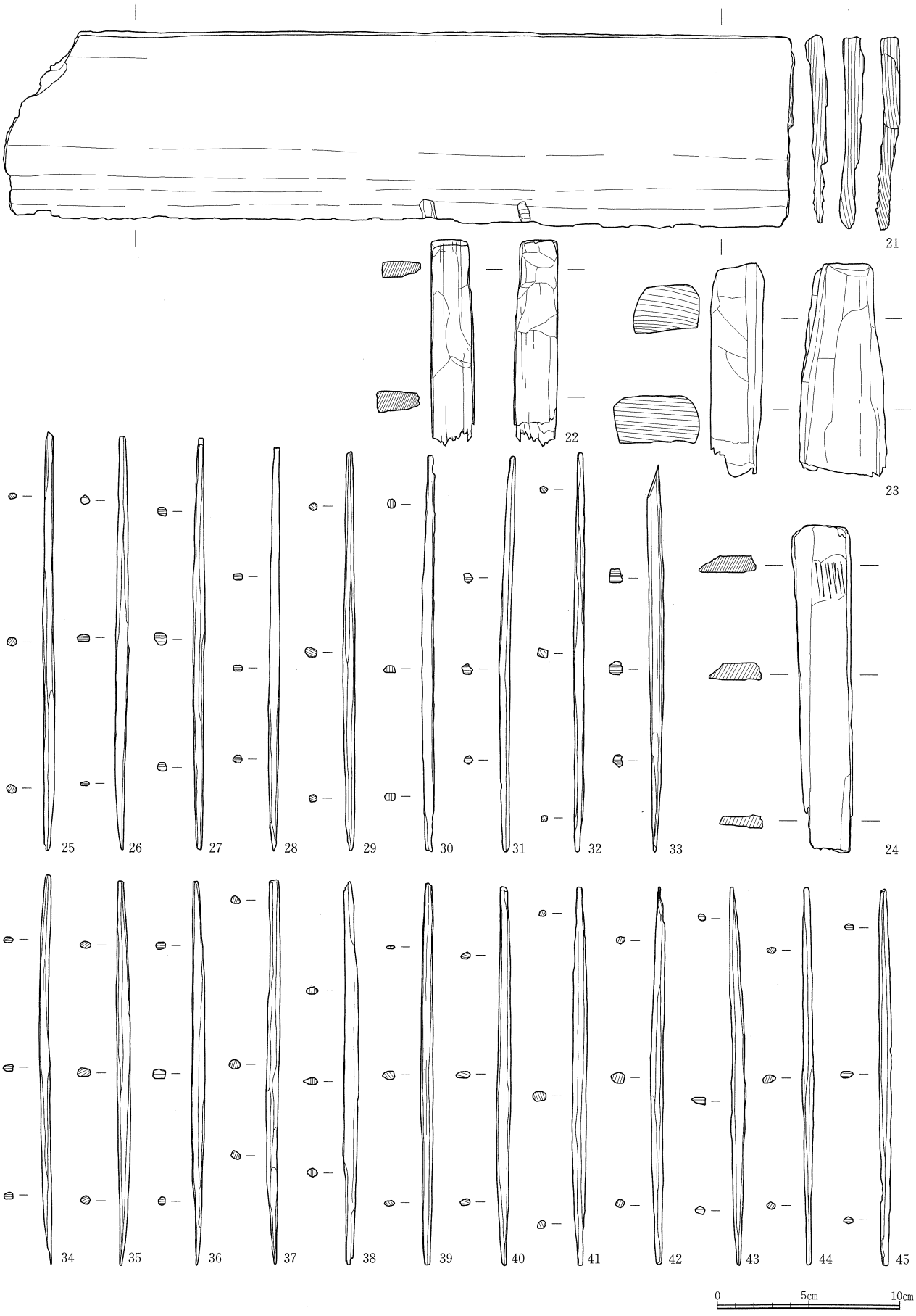
第９図　ＳＫ23箸状木製品の大きさ



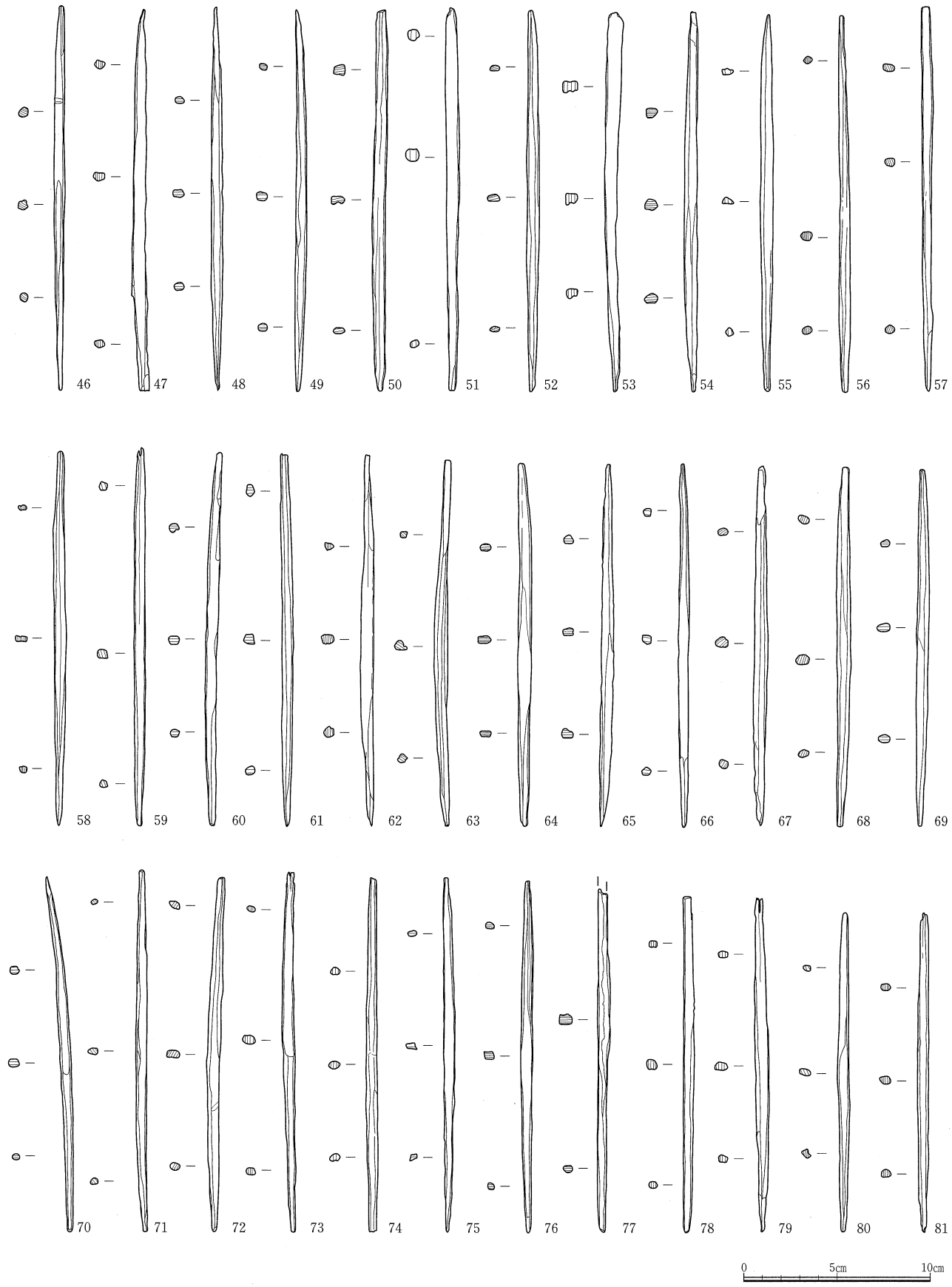
第10図　ＳＫ04出土木製品実測図（1/3）



第11図　ＳＫ04・05出土木製品実測図（1/3）



第12図　ＳＫ23出土木製品実測図（1/3）



第13図　ＳＫ23出土木製品実測図（1/3）

（6）小結

今回の調査地区では、旧河川跡の西側に長さ21.8mの溝１本のみで時期も不明である。遺跡の中心は旧河川跡よりむしろ東側に存在し、遺物が出土した遺構は限定されるが、遺構の時期は中世後半に属し、掘立柱建物２、井戸状の深さ・規模をもつ断面円筒形の土坑４（ＳＫ06・08・14・23）と平面方形の土坑２（ＳＫ04・05）の二形態が存在した。土坑から土器や木製品が出土し、調査区内の所見では建物跡２棟と少ないが集落の東側への広がりが不明であり集落規模は確認できない。

中世には各遺跡の調査によって少なからず箸状木製品が井戸や土坑・溝等から出土している。一方多量に出土した事例もあり、県内では富山市清水堂Ｂ遺跡・南砺市井口城跡や射水市針原東遺跡など数多く、どのような事柄に基づくもことなのか不明であるが、一つの遺構から50点余りが出土している。

第４節　調査結果からのまとめ

（1）箸状木製品について

箸は中国長江以南で、戦国時代（紀元前403～221年）中期の雲南祥雲大波那木槨銅棺墓より青銅の箸３本が出ている『向井ほか2001』。この他５件の記載があり木や竹の箸も用いられている。その後、中国の報告書には湖北省江稜基楚紀南故城（前漢、紀元前200～紀元８年）でも竹筒に竹箸21本が納められ、長さ20㎝と現在の箸と大差がない。第14図左上は写真を図化にしたもので、紀元前168年の馬王堆１号漢墓出土品で軑侯夫人の食案（食事用膳）であり、竹製の箸（右隅）食膳につけられていた。中国・朝鮮には他にも多くの事例が知られている。

日本では、弥生時代に魏志倭人伝で記されたように、高杯に食物を盛り手づかみで食事した様子が記されている。箸は７世紀の皇極・斉明天皇の宮・飛鳥板葺宮（643～655年）から出土した檜の二本組みのものが最古とされる。これは日常の食器でなく祭祀用と考えられ、後の藤原京（694～710年）でも出土しているが、まだ箸の使用は一般化していない。都で箸が多く見つかるのは奈良時代（８世紀）の平城宮の築造か改築で参加者の食事用としたもので、おそらく祭事の際に使い捨てで用いたものとみられている。また東大寺（743年大仏建立の詔、752年開眼供養）境内から200～300本の箸状木製品が出ている。長さは25㎝前後と現在と大きな変わりがない。また平城宮跡・京跡の調査でも８世紀の遺構から図に示したように、各種の遺物といっしょに土坑から箸状木製品が出土している『向井ほか2001』。平城宮土坑ＳＫ820（750年頃）やＳＫ217（780年頃）からの箸状木製品は、使用を具体的に示す資料である『小林ほか1972』『小川ほか1976』（注１）。

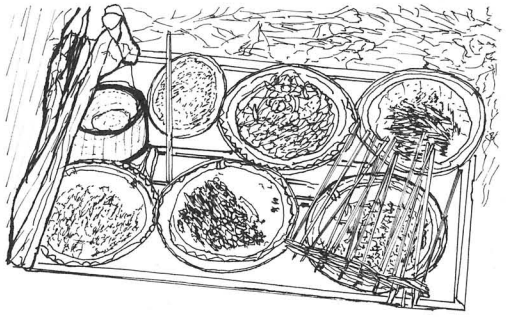
富山県では、高岡市麻生谷遺跡の井戸で覆土上面から８世紀後半から９世紀の時期に出ていることが報告されている『山口ほか1997』。この中に須恵器の杯外面に「人長」と記された墨書土器があり、古代北陸道駅の「川人（合）」と関連する遺跡とされている。井戸内への廃絶は９～10世紀初めとされ、中から箸状木製品が２本出土している。更に古代の高岡市中保Ｂ遺跡の遺物集積遺構ＳＸ03からも箸３本の出土が報告されている『根津編　2002』。遺跡から箸状木製品の出土は、一般化し多く見つかるのは12世紀後半からであり現在に至っている。

箸状木製品の多量出土した例は、中世以降の集落では発掘調査に比べ以外と少なく、祭祀に伴う食器（中世の土師質皿）のような大量廃棄とは異なり、皿と箸の組み合わせでの出土例がない。古代の土坑や井戸・溝等の廃棄に伴う祭祀（地の世界のつながりや悪霊の封じ込めを願って）などでは特別の意図をもって大量に投げ入れたものと考えられる。これまで多くの集落が調査され、井戸・土坑・溝の調査にもかかわらず箸状木製品の出土量も限られているようである。第14～16図や表６に示すように主な出土例が上げられる。土師器碗・皿や漆器椀による食膳具が一般化した反面、井戸や土坑や溝などへ大量廃棄することが少ない。

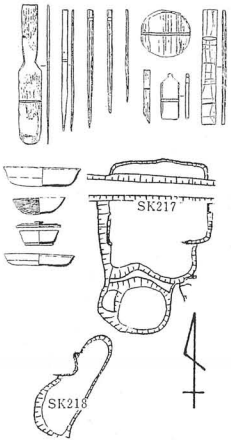
県内では上市町江上Ｂ遺跡（13～14世紀）は年代が13～15世紀で13世紀後半～14世紀が中心となる。木製品９割を占める9,113点が箸状木製品である。遺跡の性格は、名主あるいは百姓の住居と考えられる。この中、木枠施設から

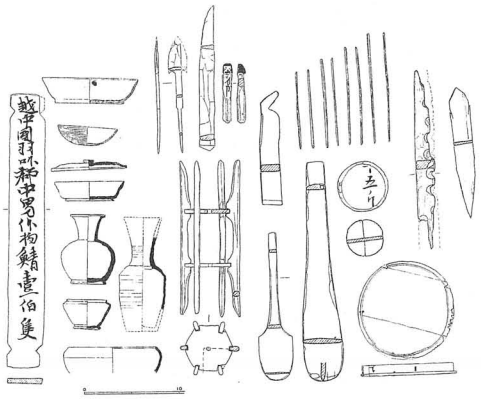
表6　箸状木製品出土の主な遺構一覧

	市町村	遺跡名	時　期	種　類	規　模	遺構名	遺構形態	箸状木製品	共伴遺物	文　献
1	奈良市	平城宮(平城宮Ⅲ)	8C(750年頃)	宮都	方形3.8×3.8、深さ1.7m	土坑SK820	素掘り・基準資料	10本	木簡・扇・刀形・人形	奈文研究1997
2	奈良市	平城宮(平城宮Ⅴ)	8C(780年頃)	宮都	3.5×6.5m、深さ0.4m	SK217・218	不定形・素掘り	3本	土師器・須恵器・曲物	奈文研究1992
3	高岡市	麻生谷(第2地区)	8C後半～9C、井戸の廃絶は9C末～10C初	集落(川人駅?)	1.0×0.9m、深さ2.75m	井戸SE202	木組井戸	2本	斎串・扇子骨・+J28須恵器杯A(人長)・蓋・甕、土師器甕	高岡市1997
4	南砺市	得成Ⅱ	12世紀	集落	1.0×0.9m、深さ2.75m	井戸SE01	素掘り	8本	漆器碗・庖丁(出土は全て底面)	南砺市2006
5	小矢部市	北反畝(1990・3)	12C後半	集落	1.8×1.5m	土坑SK01	素掘り	11本	珠洲1期鉢・壺、土師小皿	市教委1990・3
6	富山市	清水堂B(B地区)	12C後半	集落	1.5×1.5m、深さ0.6m	井戸SE02	縦板組無支持	92本	土師器皿・白磁・井戸側板	富山市1999
7	氷見市	鞍川D	13C前半	集落	楕円形3.3×2.43m、深さ2.08m	井戸・SE01	丸木舟転用側板	13本	珠洲鉢・壺、中世器皿・土錘・木杭・陽物形木製品・曲物・柄杓の柄	氷見市2006
8	南砺市	蛇喰A	13C後半～14C	集落	直径1.0m、深さ1.2m	井戸SE01	素掘り・底に曲物	多数	珠洲鉢・呪符・曲物・すりこ木・下駄杓子・杓子・竹製柄杓	井口村1998
9	南砺市	蛇喰A	13C後半～14C	集落	直径1.0m、深さ0.7m	井戸SE02	素掘り	多数	笛・曲物底板	井口村1998
10	南砺市	蛇喰A	14C	集落	直径1.0m、深さ0.7m	井戸SE03	素掘り	多数	土師器皿・呪符2・漆器碗	井口村1998
11	上市町	江上B	13C～14C	集落	1.3×1.4m	木枠施設付近SD070	木枠施設	木枠状施設付近から6,807本	土師器・珠洲鉢・甕・折敷・曲物・下駄・櫛	上市町1984
12	上市町	江上B	13C～14C	集落	長さ41m、幅0.7m	溝SD037	素掘り	960本	曲物・折敷・杓文字系	上市町1984
13	小矢部市	北反畝	14C	集落	楕円形3.3×2.43m、深さ2.08m	井戸SE01		48本	漆器碗・砥石	
14	高岡市	麻生谷(第1地区)	中世?	集落	1.7×1.3m、深さ1.6m	井戸201	木組井戸	5本、欠損43	呪符・須恵器瓶角棒・曲物底板・杭・板・楔・種子類	高岡市1997
15	舟橋村	東芦原西角堂	14世紀	集落	楕円形0.73×0.9m、深さ0.6m	土坑23	素掘り	55本	土師器皿・板材	舟橋村2001
16	射水市	針原東	14C以降	集落	長方形5×4.4m、深さ2.3	井戸SE602	方形枠・曲物	64本	木枠と水溜め曲物、珠洲鉢	小杉町1994
17	舟橋村	東芦原西角堂	14C	集落	楕円形0.73×0.9m、深さ0.6m	土坑SK23	素掘り	50本	土師器・板材	舟橋村2001
18	南砺市	井口城跡	15C後半	城跡	円形0.8×0.8m、深さ1.3m	土坑SK25	素掘り	24本	土師器皿・青磁・獅子頭・形刀木製品・折敷・漆器椀・漆刷毛・漆ヘラ・桶側板	井口村1990
19	南砺市	井口城跡	15C後半	城跡	直径2.0m、深さ2.5m	石組井戸SE02	石組	7本	土師器皿・珠洲・曲物・底板・板材	井口村1990
20	南砺市	井口城跡	15C後半	城跡	掘り方方形、1.4×1.2m、深さ0.8m	縦板隅柱井戸SE01、人頭大の礫で数10㎝埋める	縦板組隅柱横桟井戸SE01	5本	呪符2・漆篦・土師器皿・珠洲甕片・小型曲物・板材	井口村1990
21	石川県穴水町	桜町	13C	集落	1.31×0.88m、深さ1.18m	土坑SK05	素掘り	406本	土師器碗・皿、馬形	穴水町1987
22	石川県穴水町	桜町	13C	集落	2.08×2.0m、深さ2.0m 方形横桟支柱	井戸SE01	方形枠	22本	珠洲水瓶・土師器・青磁・白磁器・杓子・曲げ物・漆器椀・下駄	
23	石川県穴水町	御舘	13C後半～14C	集落	方形1.57×1.47m、深さ1.32m	井戸SE03	素掘り	2,956本	鳥形木製品・土師器碗・珠洲鉢・壺・曲物底板・白磁・青磁碗	穴水町1987
24	石川県穴水町	白山橋	13C後半	集落	1.4×1.4m、深さ0.7m	土坑SK02	素掘り	191本	珠洲・土師器皿・青磁・木札	穴水町1987
25	石川県穴水町	白山橋	13・14C	集落	長方形6×3m、深さ0.2m	祭祀遺物埋納遺構	素掘り	3,444本	土師器皿・青磁・獅子頭・人形・舟形・刀形・矢形・鑓・鳥形・陽物・糸巻	穴水町1987
26	新潟市	山木戸	12世紀後半	集落	1.8×1.7m、深さ1.6m	井戸SE01	井戸枠径0.75m	13本	井戸枠・漆器椀・板材・須恵器・珠洲鉢・青磁	新潟市2004
27	新潟市	山木戸	13C後半頃	集落	隅丸方形一辺4.4m、深さ0.54m	土坑SK09	隅丸方形	79本	珠洲鉢・砥石・漆碗・板材・折敷板下駄・草履	新潟市2004
28	秋田県井川町	州崎	13C～16C	集落	上端幅4.4m、下端幅3.6m、深さ0.6～0.82m	溝SD706	素掘り	5,822本(全体の59%)	曲物・形代・物差し板材等	新潟市2004
29	秋田県井川町	州崎	13C後半～?	集落	上端最大幅5.0m、総延長0.64m、深さ0.8～0.96m	溝SD49	素掘り	3,204本(全体33%)	笛・的・形代・サバマス・横槌・櫂・漆碗・編物	秋田県2000

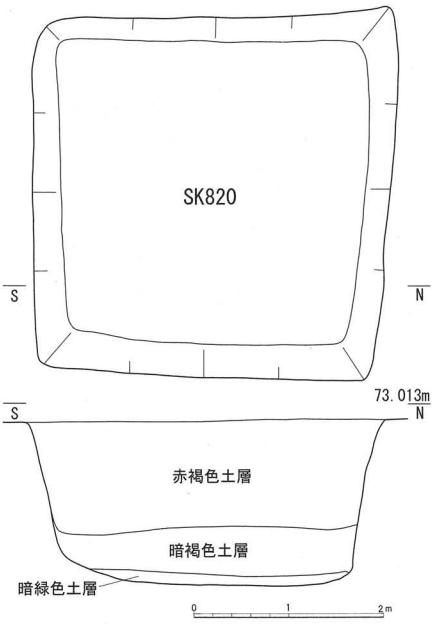


中国　馬王堆一号漢墓軑侯夫人の食案

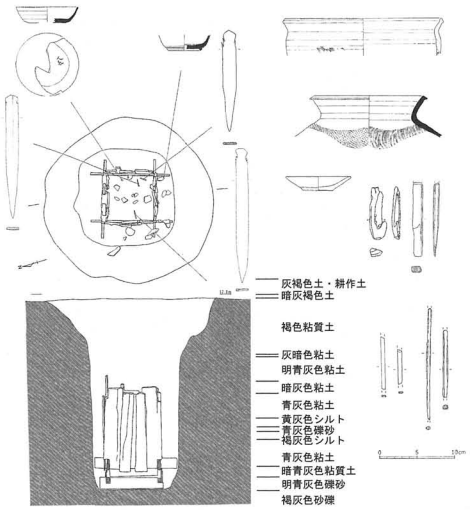




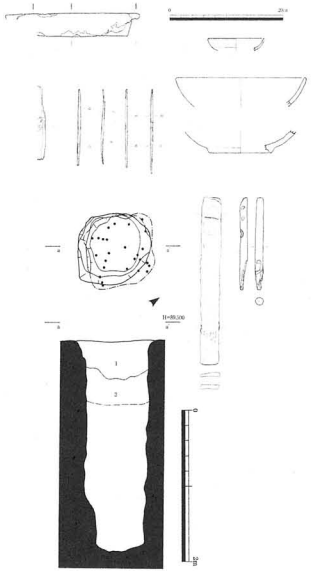
2．奈良市平城宮　土坑SK217



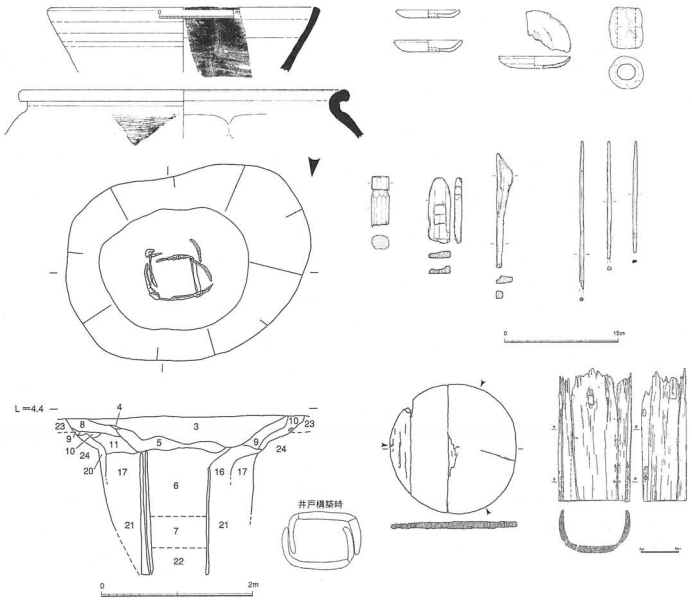
1．奈良市平城宮　土坑SK820



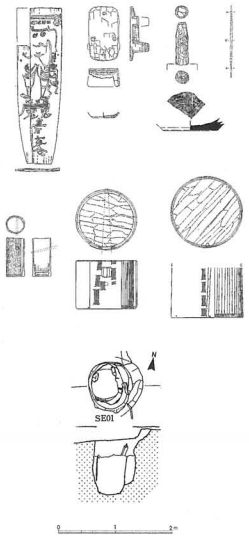
3．高岡市麻生谷遺跡（第２地区）　井戸SE202



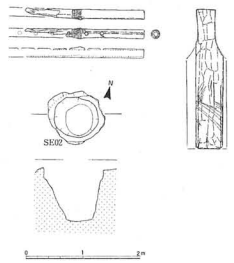
4．南砺市徳成Ⅱ遺跡　井戸SE01



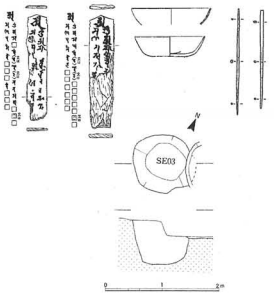
7．氷見市鞍川Ｄ遺跡　井戸SE01



8．南砺市蛇喰Ａ遺跡
井戸SE01

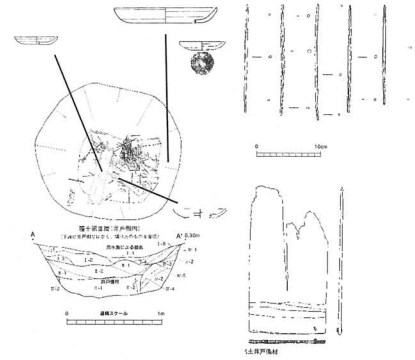


9．南砺市蛇喰Ａ遺跡
井戸SE02

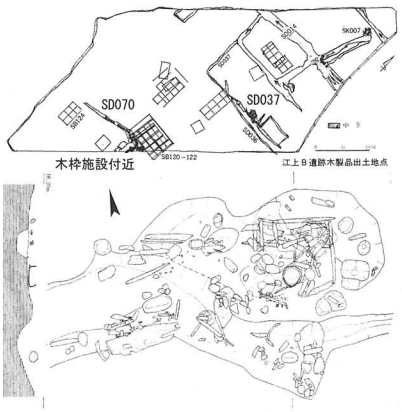


10．南砺市蛇喰Ａ遺跡
井戸SE03

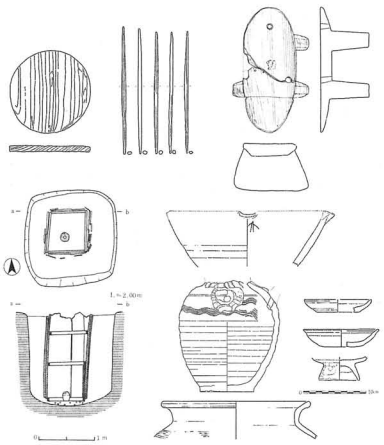
第14図　箸状木製品出土の主な遺構一覧（近県を中心に）－１



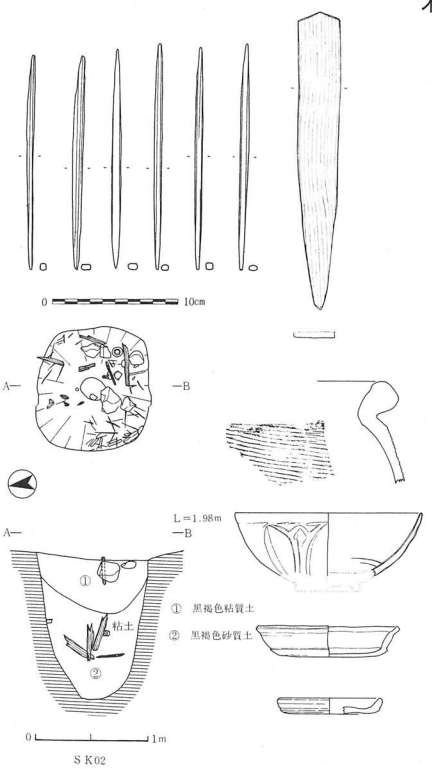
6．富山市清水堂Ｂ遺跡（Ｂ地区）
井戸SE02



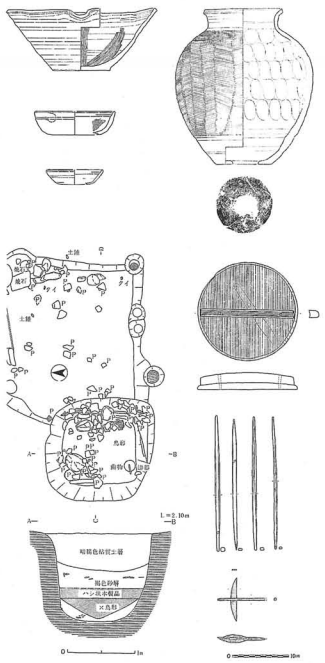
11・12．上市町江上Ｂ遺跡
木枠施設とSD070付近と溝SD037（遺跡中央）



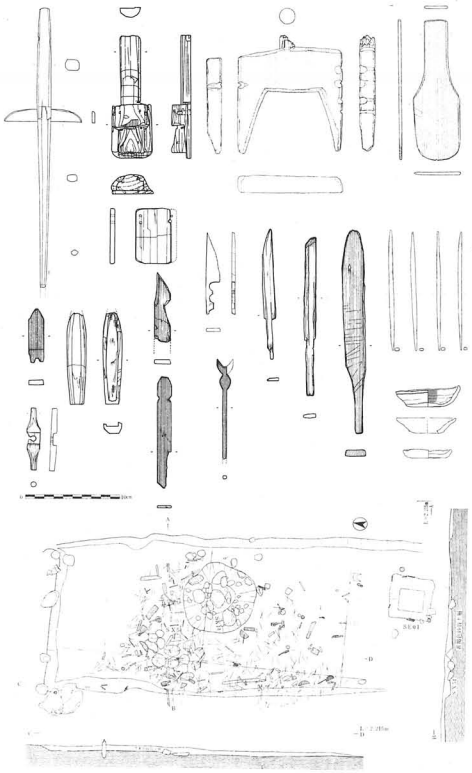
22．石川県穴水町桜町遺跡　井戸SE01



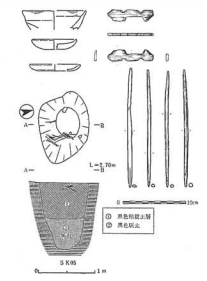
24．石川県穴水町白山橋遺跡　土坑SK02



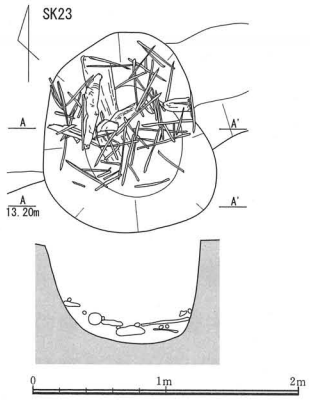
23．石川県穴水町御館遺跡　井戸SE03



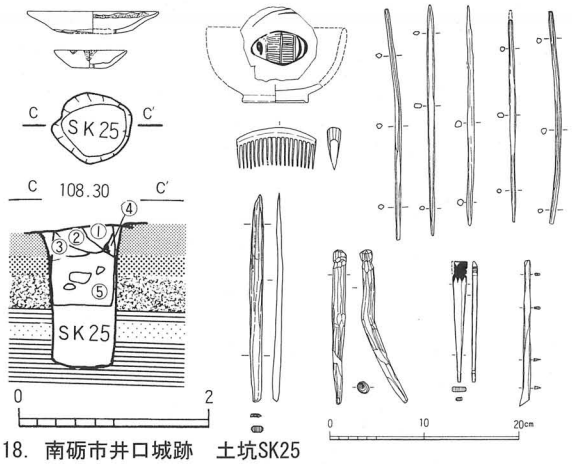
25．石川県穴水町白山橋遺跡祭祀埋納遺構



21．石川県穴水町桜町遺跡
土坑SK05

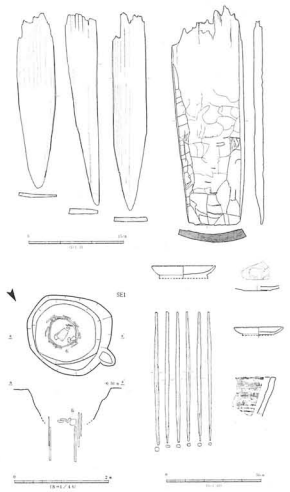


17．舟橋村東芦原西角堂遺跡　土坑SK23

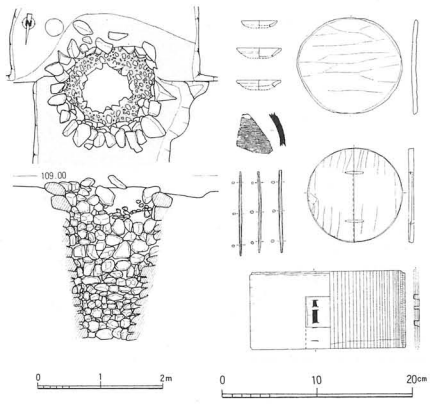


18．南砺市井口城跡　土坑SK25

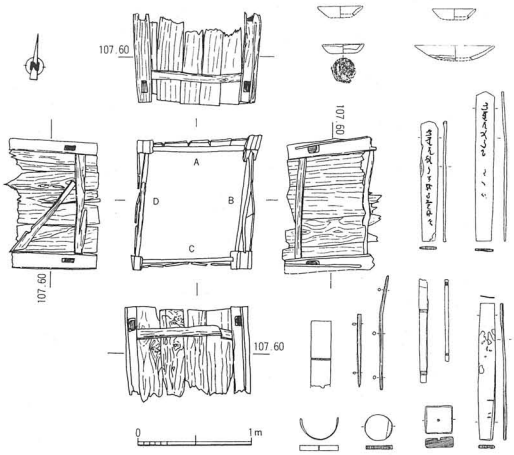
第15図　箸状木製品出土の主な遺構一覧（近県を中心に）－２



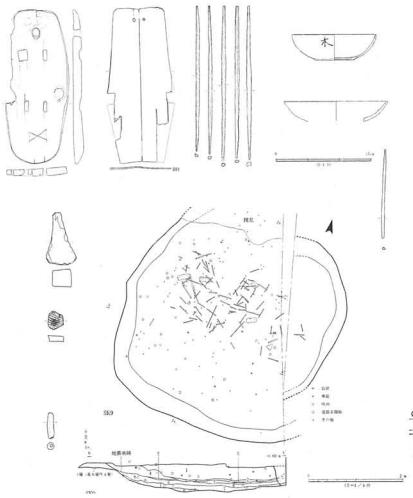
26. 新潟市山木戸遺跡　井戸SE01



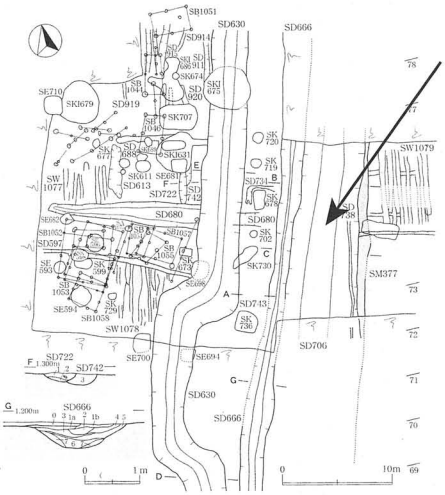
19. 南砺市井口城跡　井戸SE02



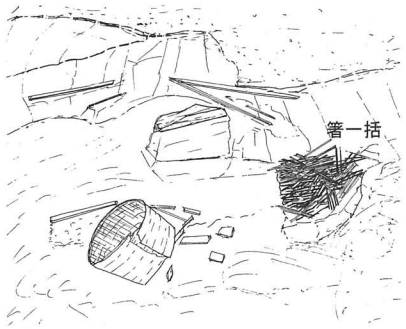
20. 南砺市井口城跡　井戸SE01



27. 新潟市山木戸遺跡　土坑SK09



SD706出土箸状木製品(500本)



28・29. 秋田県井川町洲崎遺跡　溝SD706・箸500本の図・溝SD706の出土状況

第16図　箸状木製品出土の主な遺構一覧（近県を中心に）－3

伸びた溝付近から6,807本と最も多く、次いで遺跡中央に存在するＳＤ037から960本が出土している。

南砺市の蛇喰Ａ遺跡井戸ＳＥ03や井口城跡の井戸01、高岡市麻生谷遺跡１地区の井戸からは呪符とともに箸状木製品・食器などが出土しており、井戸廃棄に伴い祭祀に使用されている。また、15世紀後半から16世紀初めの井口城跡の主郭内では井戸状の機能をもっている土坑、或いは堀・溝各所からまとまった箸状木製品が出土し、遺跡の種類によっても多くの箸状木製品が祭祀と生活用具等と共にみつかっている。

石川県穴水町西川島遺跡群では、祭祀遺物と共に箸状木製品を用いた祭祀が行われている。桜町・御館・白山橋遺跡の各遺跡では祭祀的な行為に伴い、特定の形代などと共に遺構に廃棄されている。桜町遺跡土坑５号では406点の箸状木製品と下層から馬形２点の形代が出土し、土坑上面には箸状木製品が、斎串のように立てられていた。桜町遺跡の１号井戸では、方形木組み井戸枠の底部ほぼ中央に珠洲水瓶の注口部に箸状木製品が差し込まれ神霊が籠もる容器であったことを示していた。また御館遺跡３号井戸では井戸の下層に鳥形木製品を置き、その下20cmの土層中に箸状木製品約3,000本と共に曲物・漆器などが同時に納められてその上部を粘質土が覆っている。

更に白山橋遺跡祭祀遺物埋納遺構では、６×３ｍの長方形の土坑に悪疫災禍を払うミニチュアの獅子頭や人形・舟

形・刀形・矢形・鳥形などを配し、数千本の箸状木製品が古代の斎串のように聖域を設けて全面を覆っていた『四柳1974・1987』。箸が斎串と同じように神聖な役割をもって使用されてと想定される。

また、秋田県井川町洲崎遺跡（13世紀後半～）では多くの掘立柱建物群と井戸が検出され、溝（堀）ＳＤ706・49から9,026本（遺跡全体約9,800本の内、92％に相当）の箸状木製品が出土し、まとまった状態で出土している。

なお、箸の事柄全般にわたって記載された書籍『向井ほか2001』には、割箸や漆塗り箸の使用が江戸時代になって始められたものであり、それ以前は素木を用いている。絵巻物が盛んに描かれた12・13世紀の絵巻物にはこの頃に日本で箸が一般化した様子が描かれている。箸は、常に個人用の膳椀と共に用いられており、箸が椀のような深みのある食器の中の食物をつかみやすいことが、普及につながった。「しかし日常の食事に用いる箸は素木であり１回の食事に１度きり用いられていた。」『向井ほか－297ページ－』と記されている。中世に書かれた絵図には箸の使用した例が多くあるが、箸の大量廃棄を示唆するような絵図は見られない。

中世の集落の調査報告書でも、箸の出土が報告されているが、大量の出土事例は管見では、近県は一覧表のように限られており、箸の出土量が逆に建物数に比べ少ないことが多く上記の証明が困難であった。供養や薪のように一緒に燃やすのか、河に流すのか調査では把握できない。今後の調査事例の推移をみながら再考していきたい。１回きりの使用は民族学での「ハレ」や「ケ」の儀式や祭祀など特殊な行事の場合に限られることなのか調査からの検証は難しいことである。多量の出土例は中世以降の集落では以外と少なく、祭に伴う食器（土師質皿）のような大量廃棄との組み合わせもなく、土坑や井戸・溝等の廃棄に伴う祭祀など特別の意図をもって大量に投げ入れたものと考えられる。

これまで多くの集落が調査されているが、井戸や土坑からの箸状木製品の出土量も限られ（第14～16図や表６）、むしろ少数しか出土しない例が大半を占めている。土師器碗・皿や漆椀による食膳具の一般化と合わせ井戸や土坑や溝などへの大量廃棄は少ない。

なお、箸の使用は16世紀中葉以降の供膳具・土師器椀の形態変化を生じ、また木製食器（漆器の普及）と廉価な大量生産される庶民の日常食器と密接な関係を持っていると思われる。

（２）集落について

今回の調査で２棟の掘立柱建物跡を検出した。柱穴からの遺物出土はないが、周辺遺構の時期が14～15世紀である。ＳＢ01は２×２間で床面積が16.3㎡であり、ＳＢ02は１×１間に張り出しがあり床面積3.9㎡と小規模である。第17図は舟橋村のこれまで中世集落で調査された掘立柱建物の時期ごとによる床面積の比較である。13世紀（鎌倉時代）では小規模なものはなく、36・43・45㎡の中規模な建物跡と89・93・117㎡の大規模な建物跡であり、集落の外側には「コ」の字状の溝が巡り、溝内に大型建物・小型建物がセットとなって存在する。次いで14～16世紀頃には建物規模が縮小し柱間や柱並びもばらつきがみられる。14～16世紀では、建物の床面積が４～18.5㎡と小規模な建物が存在し、立山町横沢遺跡では16世紀の建物に39㎡の建物１棟があるだけである。

県内の中世集落をまとめた宮田の成果『宮田1997』と比較すると、13世紀には小・中規模建物２に対し、大規建物１の割合で集落が構成され、集落の外側には「コ」の字状溝の配置がされ舟橋村浦田遺跡の中世集落と共通性がある。14世紀には小規模な建物が多く、柱の配置や柱並びもばらつきがあり、農民の階層分化が進み15世紀後半以降には集村化してくるようである。

当遺跡では、調査区の東側に集落が存在し、掘立柱建物の床面積が16.3㎡と3.9㎡と小規模建物の間隔は３ｍ離れている。桁行がほぼ同方向、柱跡が多数存在することから周辺にまだ建物群が存在していたと推定される。

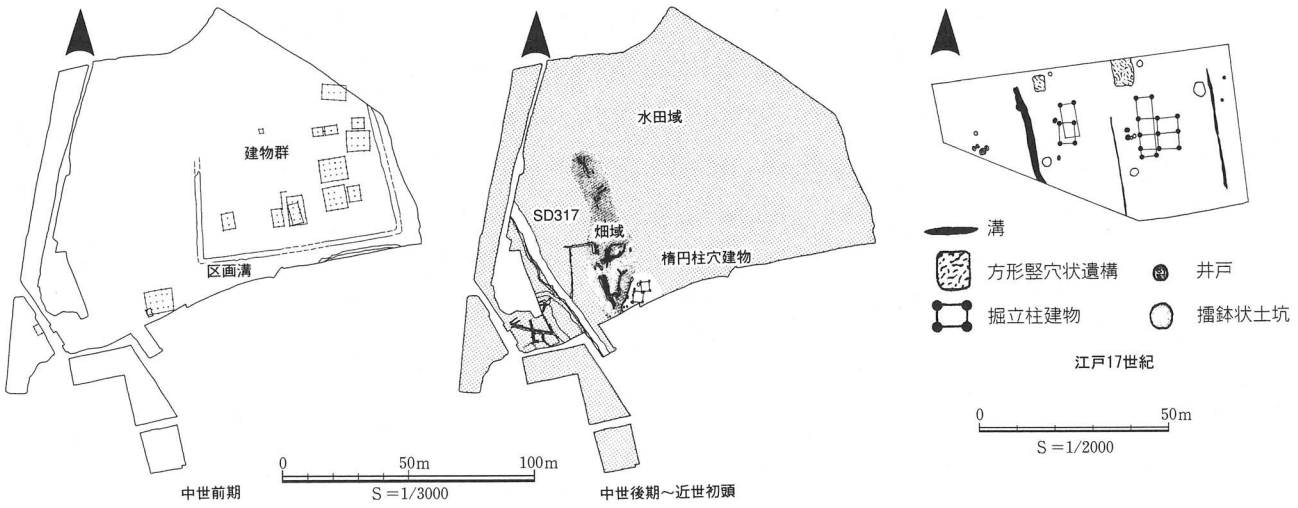
舟橋村に隣接した富山市水橋清水堂南遺跡では、江戸時代（17世紀後半～18世紀前半）に２軒の屋敷地が調査報告されている『鹿島ほか2000』。各家敷地内の建物規模や遺構配置の様子がよくわかる（第18図）。西側屋敷地は東側屋

敷地に比べ少し小型化している。東側には大型の竪穴状遺構（深さ0.2mで隅丸方形で上端部で2.5m×3.0mの規模）や大型の掘立柱建物があり、いずれも建て替えが行われていて越中瀬戸23点が出土している。井戸は石組みであった。東芦原西角堂遺跡でも越中瀬戸が出土しており、当遺跡から白岩川を挟むわずか北北東2.0㎞隔てた遺跡で近世の屋敷が調査された。今後、舟橋村の遺跡からも江戸時代の遺物が出土し江戸時代の村や屋敷が発見される可能性が予想される。

注１　第14図の１．平城宮ＳＫ820からは木簡1,843点が出土し、完形の木簡が一割で削り屑と木簡の細片８割が占める。中でも紀年木簡42点の内、天平17～19年までの３年間が最も多く、750年頃を最終とする遺物とされている。このことから土器編年の時期を特定する基準遺物として全国的に注目されている遺物である。ＳＫ820出土の「越中国能登郡中男作物」の木簡は当時の北陸の様子を伝える貴重な資料である。能登郡は741～757年に越中国に併合されており、越中守大伴家持が能登四郡を巡行するのは748年春である。先の木簡裏面に天平18年（746）年号が記された税として都に収めた荷札木簡である。紀年木簡と同一土坑から出土した箸から都での８世紀半ばでの使用を具体的に示した例である。

遺跡名	時期	床面積（m^2）											
		10m^2	20m^2	30m^2	40m^2	50m^2	60m^2	70m^2	80m^2	90m^2	100m^2	110m^2	120m^2
浦田	13C		東芦原SB01		36	43 45				89	93		117
東芦原・東芦原西角堂	14～15C	4	12 16										
仏生寺跡	15～16C初	6.4			横沢Ⅱ								
浦田・横沢Ⅱ	16～17C初		18		39								

第17図　舟橋村と付近の中世掘立柱建物の床面積



舟橋村浦田遺跡　　富山市水橋清水堂南遺跡

第18図　舟橋村と付近の中近世集落の変遷

引用・参考文献

イ　諫山えりか・森良子ほか　2004　『新潟市山木戸遺跡』　新潟市教育委員会

伊藤隆三・塚田一成　1990　『富山県小矢部市北反畝遺跡－条理遺構の調査概要Ⅱ－』　小矢部市教育委員会

小川修三ほか　1976　『平城宮発掘調査報告Ⅶ』　奈良国立文化財研究所

岩本正二ほか　1996　『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 Ⅴ』　広島教育委員会

カ　鹿島昌也･安達志津　2000　『富山市水橋清水堂南遺跡』　富山市教育委員会

鹿島昌也ほか　2008　『富山県八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　富山市教育委員会

岸本雅敏･狩野睦ほか　1998　『北陸自動車道調査報告－上市町遺構編－』　上市町教育委員会

久々忠義・酒井重洋ほか　1994　『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品･総括編－』　上市町教育委員会

小林高範ほか　1990　『富山市水橋清水堂南遺跡・清水堂Ｂ遺跡』　富山市教育委員会

小池伸彦　2007　「箸」『歴史考古大辞典』　吉川弘文館

小林剛ほか　1972　『平城宮発掘調査報告書Ⅱ』　奈良国立文化財研究所

サ　佐藤聖子・藤田慎一　2006　『富山県南砺市徳成Ⅱ遺跡』　南砺市教育委員会

斉藤隆・橋本正春　1997　『富山県舟橋村塚越Ⅰ遺跡－第３・４次発掘調査報告書』　舟橋村教育委員会

酒井重洋　1996　「北反畝遺跡」『第９回　飾る・遊ぶ・祈るの木製品』　北陸中世土器研究会

神保孝造ほか　1998　『蛇喰Ａ遺跡』　富山県井口村教育委員会

新宅輝久・野浩一ほか　2008　『富山県中新川郡舟橋村　横沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　舟橋村教育委員会

タ　高梨清志ほか　2000　『浦田遺跡』　舟橋村教育委員会

高梨清志･高橋真実　2001　『仏生寺城跡発掘調査報告』　舟橋村教育委員会

高橋学・渡邊慎一ほか　2000　『洲崎遺跡』　秋田県教育委員会

ネ　根津明義編　2002　『中保Ｂ遺跡調査報告』　高岡市教育会

ハ　原田高範ほか　1994　『小杉町針原東遺跡発掘調査報告書』　小杉町委員会

廣瀬雅樹　2006　『鞍川Ｄ遺跡－鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅱ－』　氷見市教育委員会

北陸中世土器研究会　1995　『第８回　北陸土器研究会―中世北陸の木製容器－　』

マ　前原靖・湯原勝美　2005　『富山県舟橋村東芦原遺跡発掘調査報告』　舟橋村教育委員会

前原靖・岡本純一郎　2007　『富山県舟橋村東芦原遺跡発掘調査報告２』　舟橋村教育委員会

三鍋秀典ほか　1999　『横沢Ⅱ遺跡－第２次発掘調査報告』　富山市教育委員会

宮田進一　1997　「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』
北陸中世土器研究会編　桂書房

宮田進一　1997　「越中国における中世村落の様相」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』
北陸中世土器研究会編　桂書房

向井由紀子・橋本慶子　2001　『ものと人間の文化史－箸－』　法政大学出版局

ヤ　山口辰一・武部善充ほか　1997　『麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡調査報告－平成４～７年度主要道路工事に伴う調査－』
高岡市教育委員会

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

四柳嘉章　1997　「北陸の中世漆器」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』
北陸中世土器研究会編　桂書房

四柳嘉章　1987　『西川島－能登のおける中世村落の発掘調査』　穴水町教育委員会

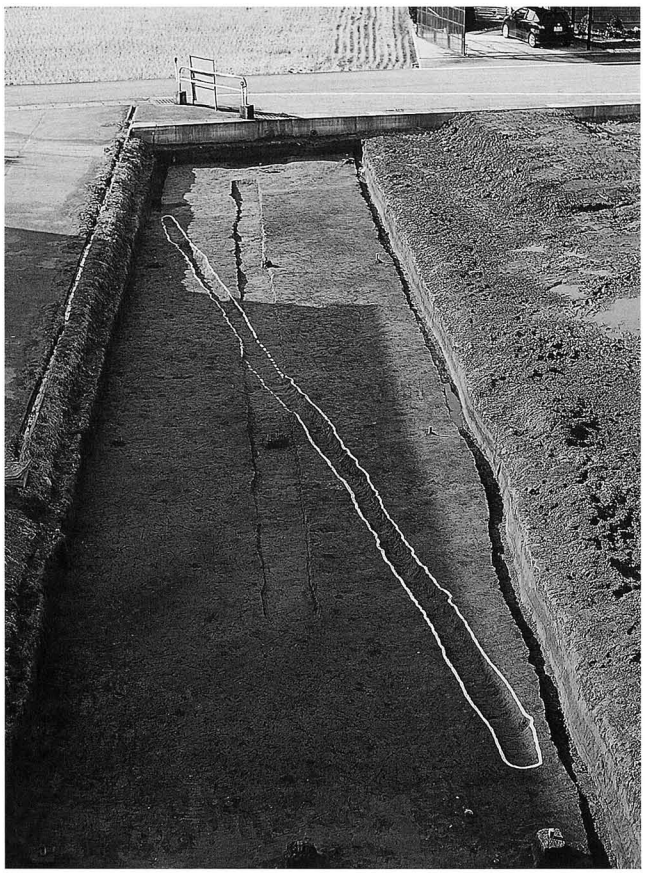
四柳嘉章　1983　「能登の中世荘園村落のおける信仰－穴水町西川島遺跡群の調査から－」
『石川考古学会々誌』　第27号

１．遺跡遠景（西から）

２．発掘調査前の状況（西から）

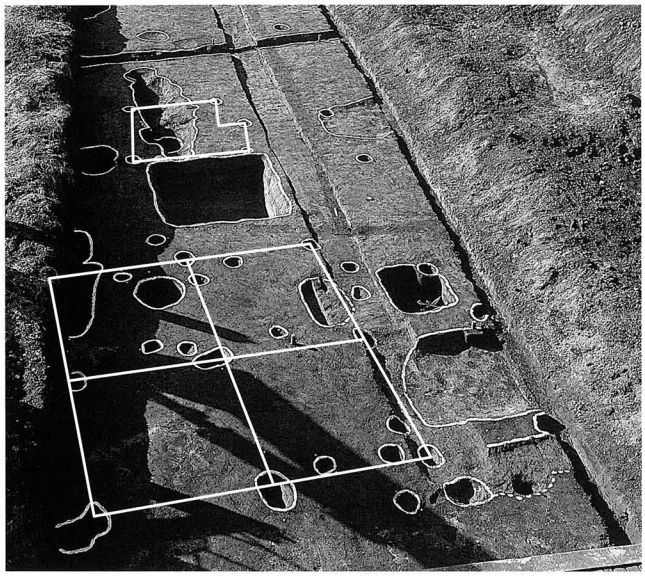
３．表土掘削後の状況（西から）

４．調査区西側の遺構（手前ＳＫ22西から）



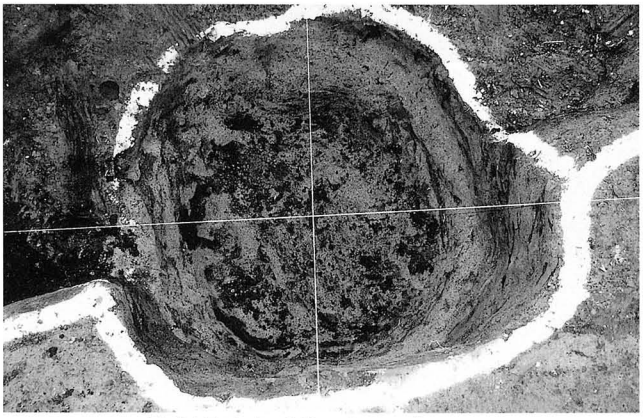
５．調査区東側の遺構（ＳＤ25東から）

遺構写真図版２



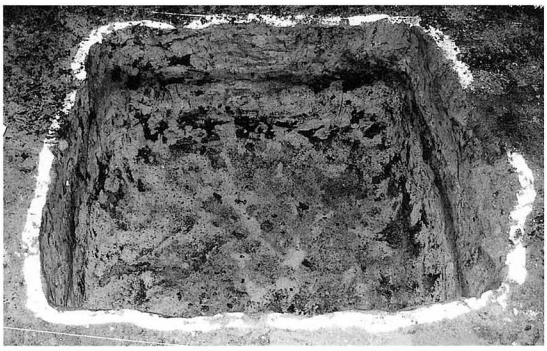
１．ＳＢ01（手前下）、ＳＢ02（奥上）、東から

２．ＳＫ23（箸状木製品の出土）



３．ＳＫ23（木製品取上げ後、北から）

４．ＳＫ04（焼けた木製品出土状況）



５．ＳＫ04（木製品取上げ後、南から）

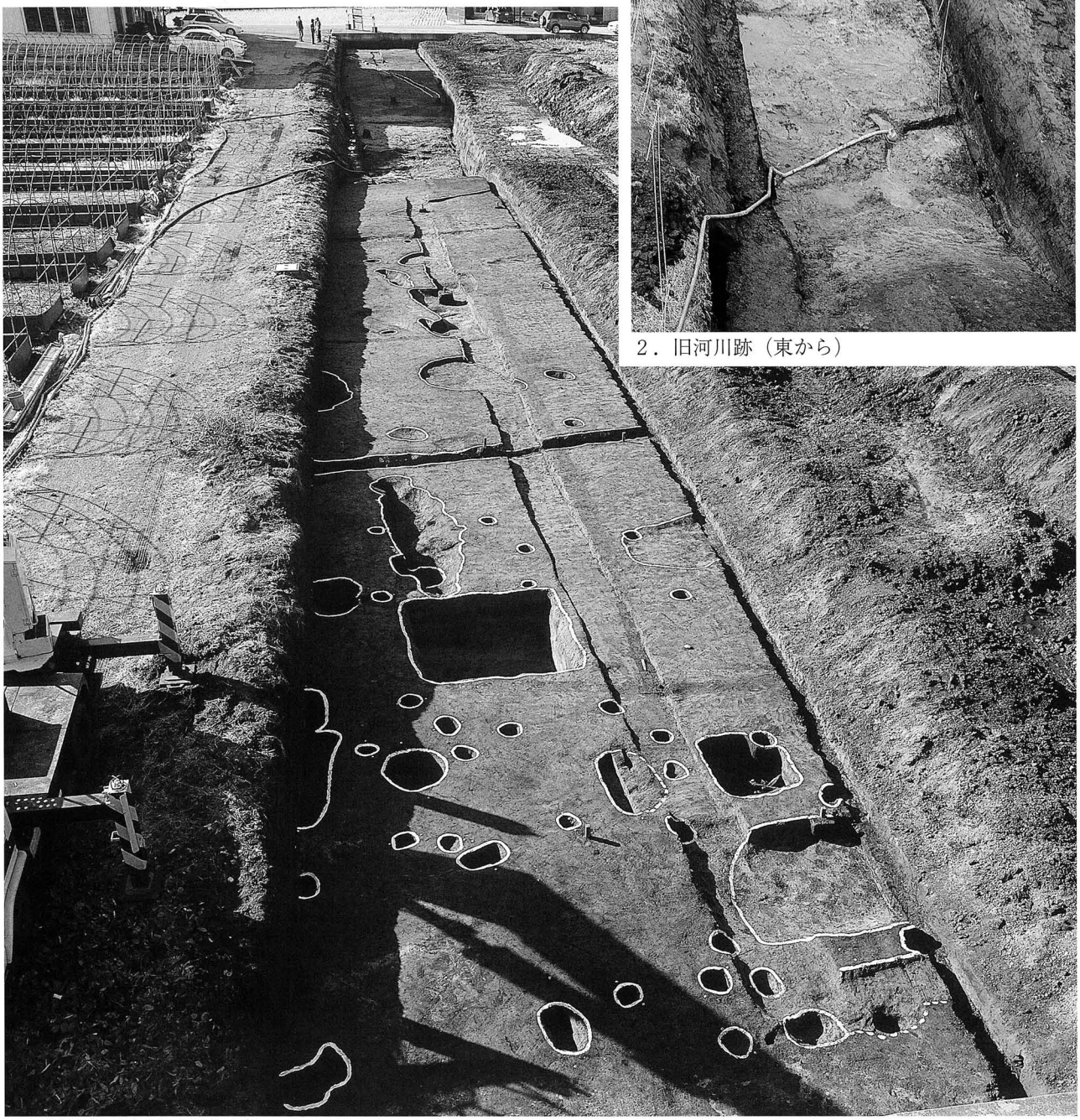
６．遺構の掘削作業（東から）

７．実測・測量作業（東から）

８．旧河川跡の調査状況（東から）

1．旧河川跡（南西から）

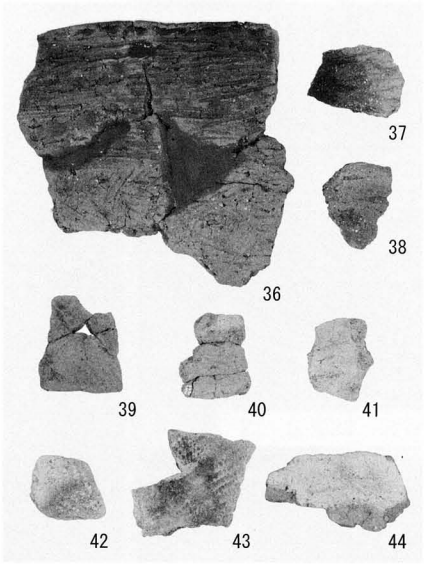
2．旧河川跡（東から）



3．掘削後の全景（西から）

遺物写真図版１

1．縄文土器（旧河川跡出土1/4）



2．縄文土器（1/4）

3．白磁（ＳＫ04 1/2）

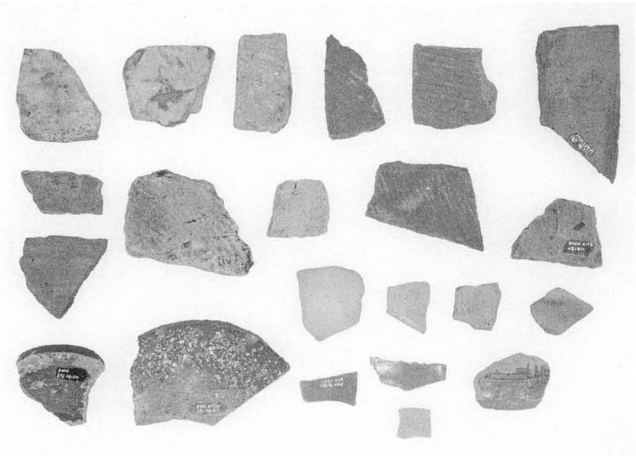
4．土師質土器（1/2）

5．土師質土器（ＳＫ06 2/3）

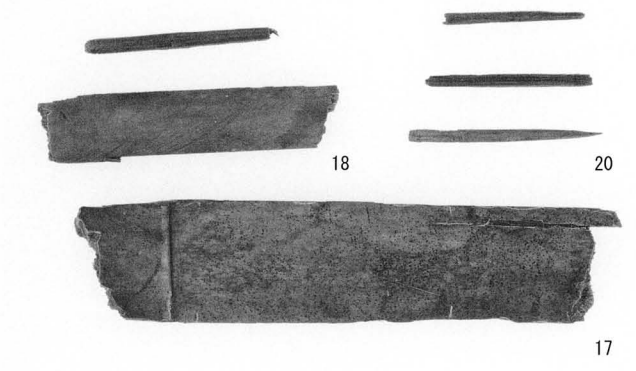
6．土師質土器（ＳＫ23 2/3）

7．越中瀬戸皿（旧河川肩下層 2/3）

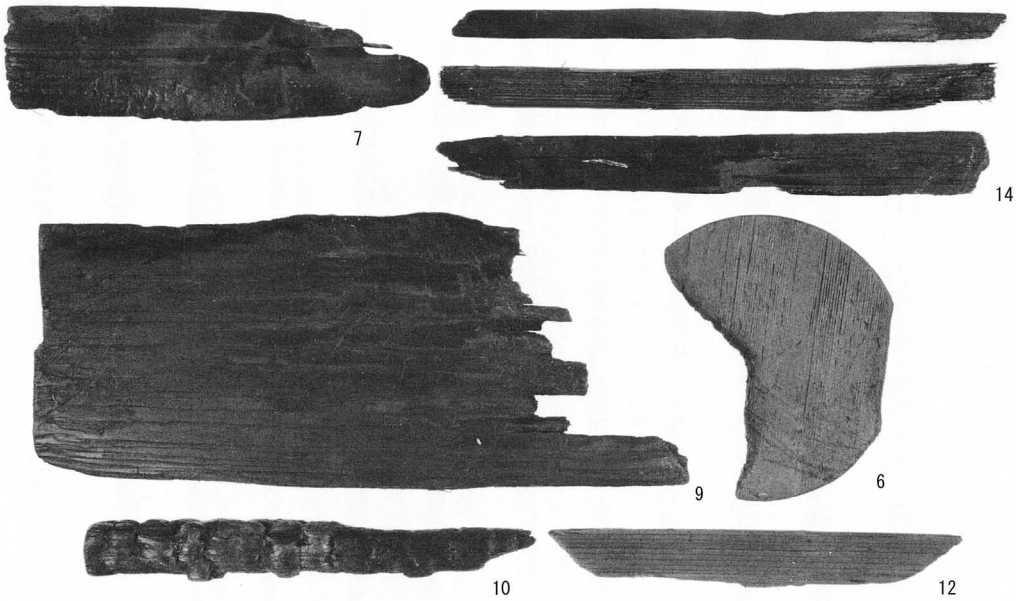
8．越中瀬戸皿（ＳＫ20 2/3）



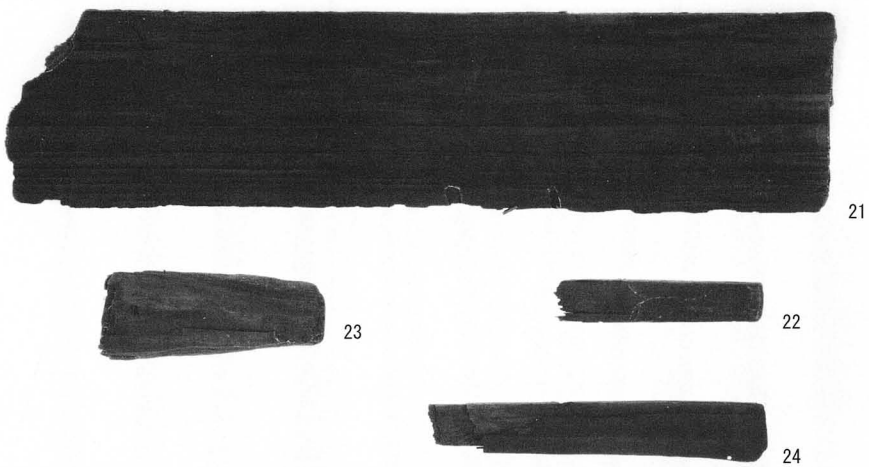
9．須恵器・珠洲・土師質土器など（1/4）



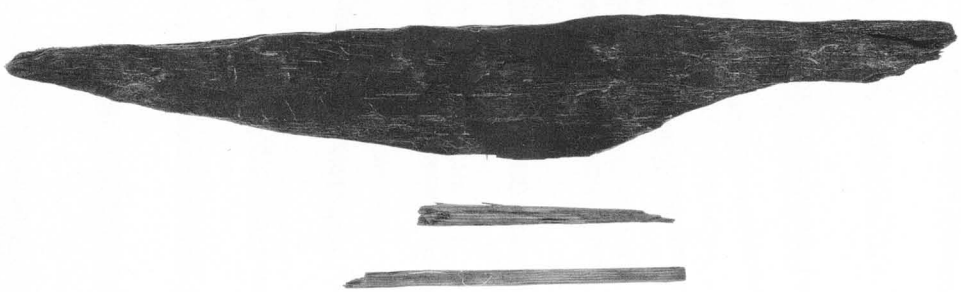
10．ＳＫ05出土の竹・木製品（1/3）



1．木製品（ＳＫ04 1/4）

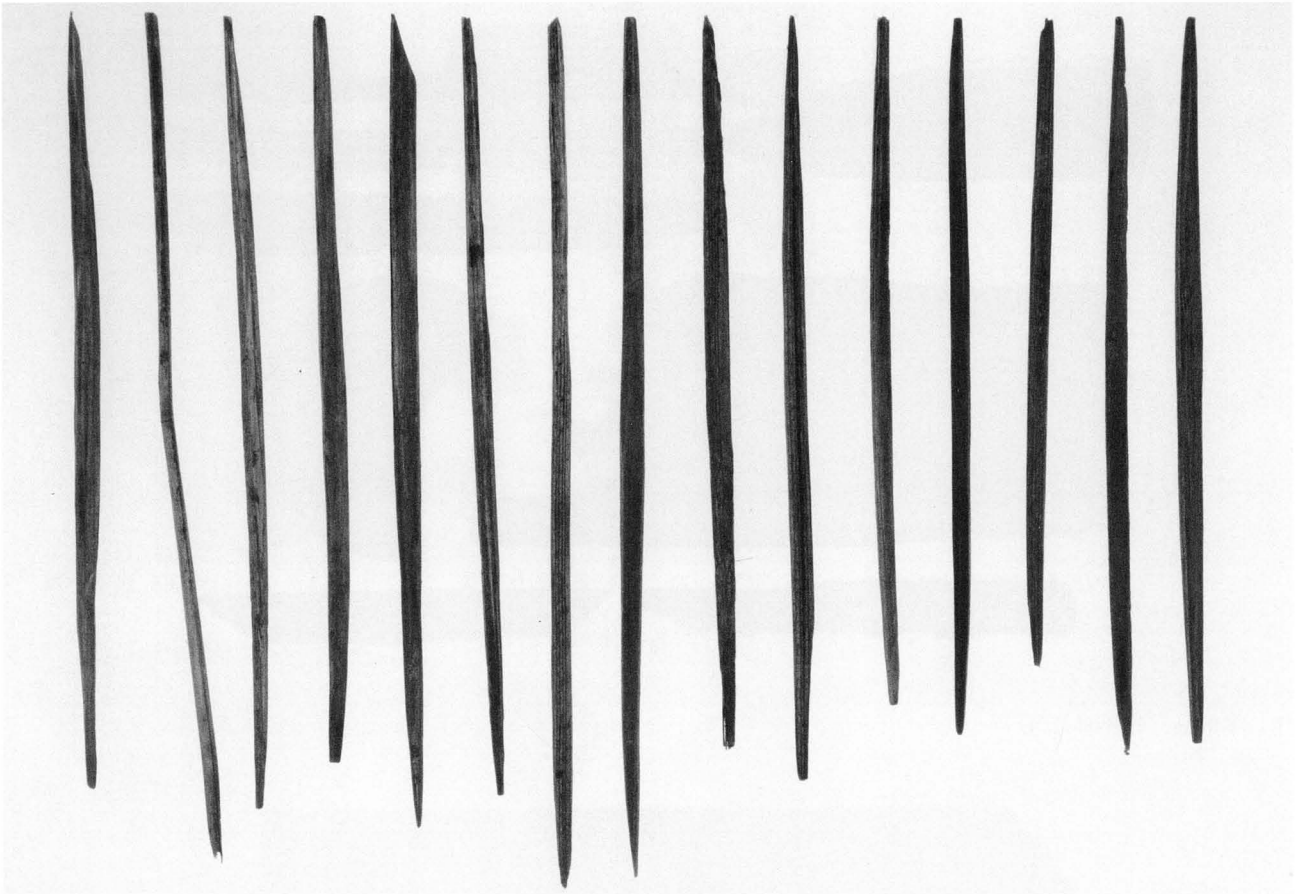


2．木製品（ＳＫ23 1/4）

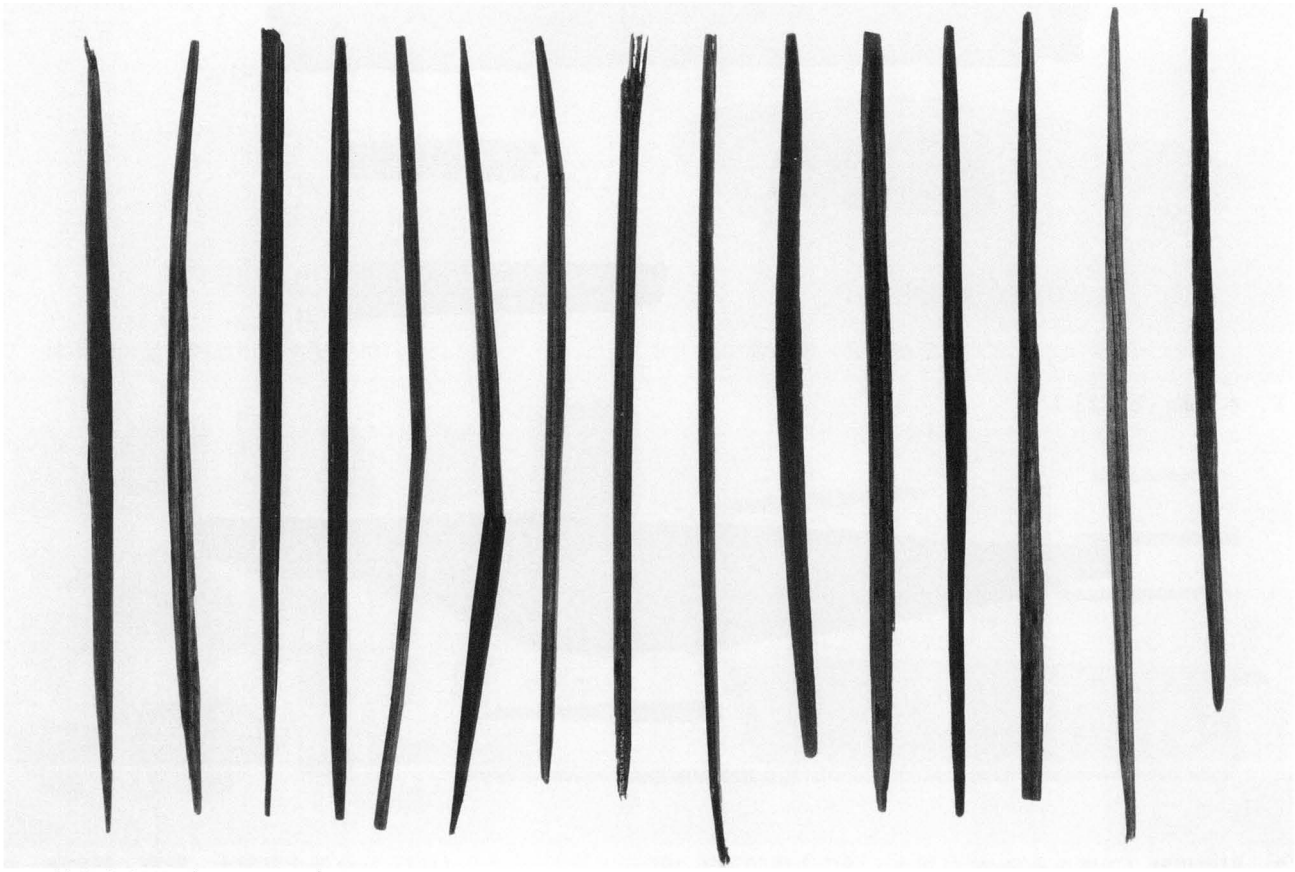


3．旧河川跡（下層出土 1/4）

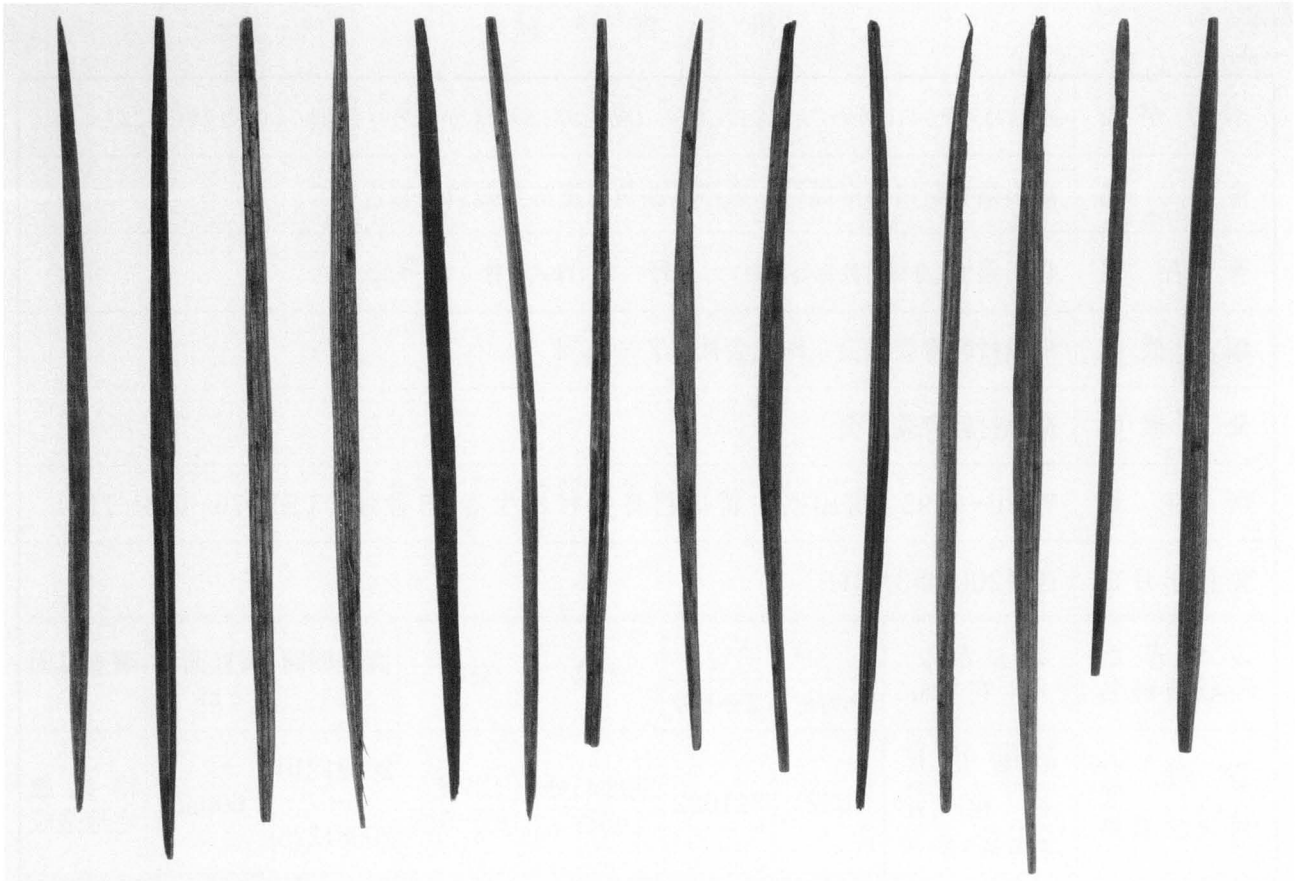
遺物写真図版 3



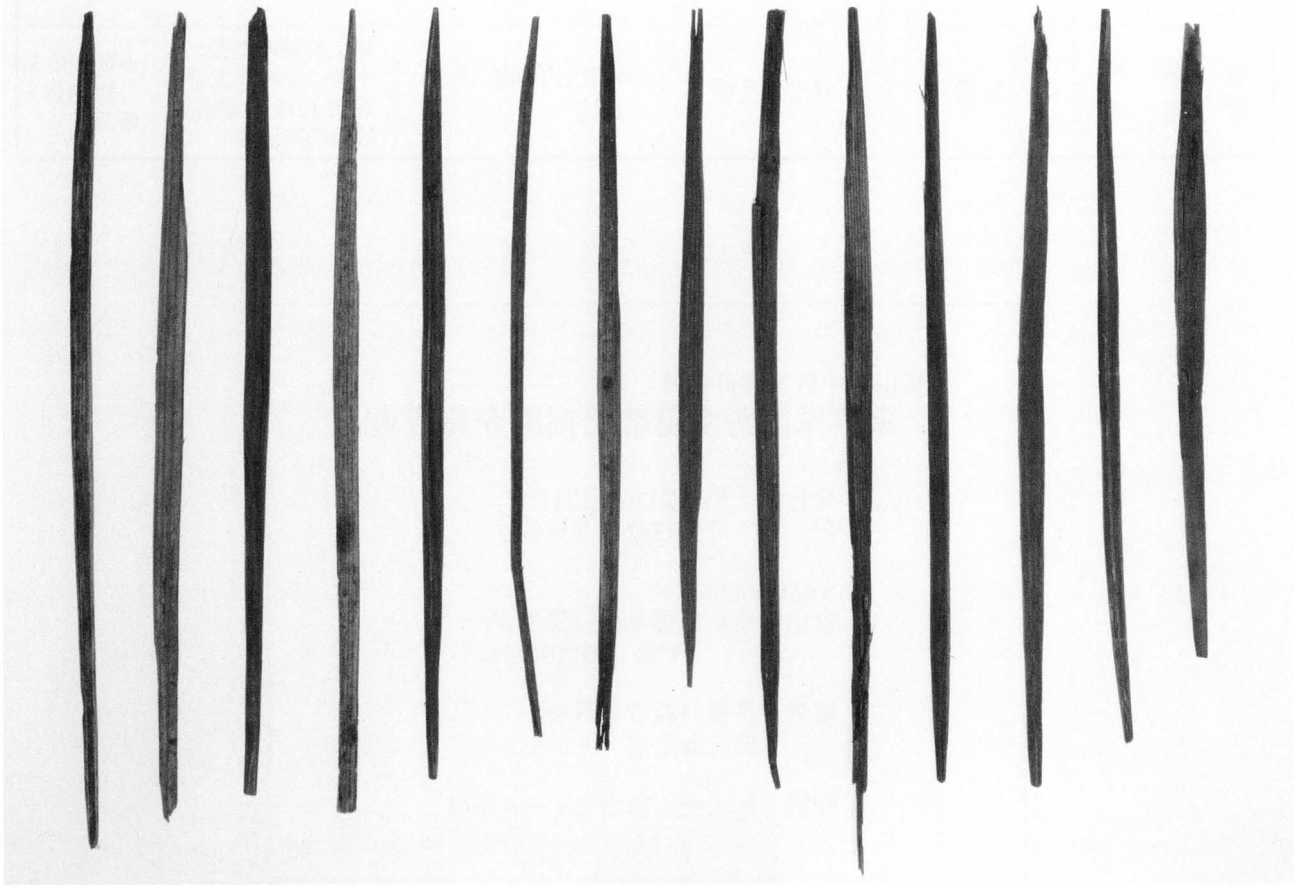
1．箸状木製品（ＳＫ23 1/2）



2．箸状木製品（ＳＫ23 1/2）



1．箸状木製品（ＳＫ23 1/2）



2．箸状木製品（ＳＫ23 1/2）

報告書抄録

ふりがな	とやまけんなかにいかわぐんふなはしむら　ひがしあしはらにしかくどういせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山県中新川郡舟橋村　東芦原西角堂遺跡発掘調査報告書
著者名	喜田義樹（舟橋村教育委員会）　上野　章（株式会社　アーキジオ）
編集機関	舟橋村教育委員会　株式会社　アーキジオ
発行機関	舟橋村教育委員会
所在地	〒930−0295　富山県中新川郡舟橋村佛生寺55番地　TEL076−464−1121
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東芦原 西角堂遺跡	中新川郡 舟橋村 東芦原35−1	16321	321022	36度41分 45秒	137度 18分 5秒	20081210 〜 20081226	600m^2	格納庫 宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東芦原 西角堂	集落	中世・近世	堀立柱建物、溝、 土坑	縄文晩期の土器、 中世の土師質土器・ 珠洲・白磁・木製品、 近世の陶磁器	中世後半期 の建物跡を 確認

富山県中新川郡舟橋村
東芦原西角堂遺跡発掘調査報告書

発行日　平成21年3月31日
発　行　舟橋村教育委員会

〒930−0295
富山県中新川郡舟橋村佛生寺55
TEL 076(464)1121

編集　舟橋村教育委員会
株式会社 アーキジオ

印刷　株式会社 富山フォーム印刷